

松と藤芸妓の替紋

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫

今日こんにちより改まりまして雑誌が出版になりますので、社中かわる／＼もちまえ持前のお話をお聴きに入れますが、私わたくしだけは相変らず人情の余りお長く続きません、三冊あるい或は五冊ぐらいでお解りになりまする、まだ新聞に出ませんお話をお聴に入れます。これは明治四年から六年まで、三ヶ年の間お話が続きます、実地あつたお話でございます。さて俗語に苦は樂の種、樂しみ極きわまって憂いと申しますが、苦勞をなすつたお方でなければ只今、お樂になつて入らつしやるものはございません。大臣参議いへいと雖も皆戦争の巷ちまたをくゞり抜け、大砲の彈丸たまにも運うん好く中あたらず、今では堂々たる御方おんかたにお成り遊ばして入らつしやるのでございますがまだ開ひらけません時分、亜米利加アメリカという処は何ういう処か、仏蘭西フランスはどんな国だか分らない中うちに洋行をなさいます、然そうしてまた何うも船の機械も只今ほど宜よく分つても居りませんでしたのに、危険しを凌しのぎ、風波ふうはを冒おかして大洋を渡りなど遊ばして苦心をなすつたから、只今では仮令たとお役所へお出で遊ばさないでも、年金を沢山お取り遊ばすというのも、その苦勞をなさいましたお徳でございます、だから余り樂をしようと思つと、却かえつて

是が苦しみになりますことで、私などは毎日喋つて居りますから、ちと樂を為しようと思つて、一日喋らずに居たら何うだろうというと、これが苦勞の初まりで、一日黙つて居るくらい苦しみはありません。何もそんなに黙つて居るにも及びませんが、退屈でなりませんから、これは堪らぬ、ちとそろ／＼表を歩いたら樂に成るだろうというと、これが苦しみの初まりで、最もう寢足ねあしになつて居りますから歩くと股ももがすくんでまいり、歩行が叶かないませんから、そこらの車へ乗つて家うちへ行つたら樂だろうと思つて、車へ乗ると腰が痛くなつて堪らないから、仰あおもむけ向に寝たらば樂になるかと思つと、疝氣せんきが痛くなつたりしていけませんから、廊下へ出て躍おどつたら宜よかろうというように、実に人は苦の初めを樂しむと云つて、苦勞の初めばかり樂しみますことを考えますものでございます。「瓶かめに挿《さ》す花見ても知れおしなべてめづるは捨すつる初めなりけり」という歌の心は、詠ながめは誠まことにどうも総々とした此の牡丹は何うだい、宜いいねえ水を上げたところは、と珍めづらしがつて居ります、長く活いけて置けばばら／＼と落ちて来ますから、あゝ穢きたない打う棄ちやつてしまえと、今度は大山蓮華おおやまれんげの白いのを活くけこの花の工合ぐあいはまた無いと云つてゝも、末になると黄色くなつてばら／＼落ちますから捨てゝ、今度は秋草が宜よいと云つた所が、此れもそう何時迄いつまでも保たちは致いたしません、直すくに萎しおれてしましますから挿さ換かへるというように、世の中の事は此

の通りでございます。マア何でも苦勞をなさらんければいかんということ。これは松^{まつだ}
 平肥^{いらひひ}後様の御家来で、若い中^{うち}にさん／＼道楽を致し、青森県の方にお出でがありまし
 て、ちようど函館の戦争に出逢つて危い処^{あやう}を免れ、よう／＼の事で世界が鎮まつてから横
 浜へ出てまいり、外国人と取引を致し、図らざる処の幸福を得ました処から、まだ東京は
 開けません時分故、洋物店^{ようぶつてん}を神田美土代町^{かんだみとしろちよう}へ開きましたが、大層繁昌致しました。此
 のお方は苦勞人の果ゆえ、仮令^{たとひ}芸人を扱つても、芸者を相手にしても、向うの氣に入るよ
 うな事ばかり云います。今日^{こんにち}は身装の拵^{なりこしら}えがくすんでも居ず華美^{はで}でも無い様子、ちよつ
 と適當の装^{なり}に拵^{がすり}え、旧九月四日の事でございましたが、南部^{なんぶ}の藍^{あい}の万筋^{まんすじ}の下へ、琉^{りゅうき}
 球^{ゆう}の変り飛白^{がすり}の下著^{したぎ}、まだ其の頃は余り兵児帯^{へこおび}は締めません時分だから、茶猷^{ちやけん}上の
 帯^{ぞうげ}を締め、象牙^{ぞうげ}へ四君子の彫^ほつてある烟管筒^{きせるづつ}が流行つたもので、烟草^{たばこ}入れは黒棧^{くろざん}に金
 の時代の宜^いい金物を打ち、少し色は赤過ぎるが、珊瑚^{さるう}の六分半もある緒締^{おじめ}で、表付^{かぶ}ののめ
 りの駒下駄^{うまご}、海虎^{うみこ}の耳付^{みみづ}の帽子^{しやつぽ}が其の頃流行つたものゆえ、これを冠^{かぶ}り上野の広小路を
 通り掛^{だいも}ると、大茂^{だいも}の家^{うち}から出て来ましたのは、其の頃数寄屋町^{すきやちよう}にいた清元^{きよもと}三八^{さんぱち}という
 幫間^{たいこ}でございますが、幫間^{たいこ}にも種々^{いろく}有^ありまして、野幫間^{のだいこ}もあれば吉原の大幫間^{おおだいこ}も
 あります、町の幫間^{たいこ}でも一寸品^{ちよつと}の宜^よいのもあれば、がらく致^{いた}して、突然^{いきなり}人の処^{ところ}へ飛^と

びこ
込んで硝子戸へ衝突^{ぶつ}かり、障子を打毀^{うちこわ}すなどという乱暴なのもありますが、この三八は誠に人の善^よい親切な男で、真実^{まめ}に世話をするので人に可愛がられますけれども、芸は余り宜くは有りません。四入^{よつりおうめ}青梅の小さい紋の付きました羽織を着て、茶献上の帯を締め、ずか／＼と飛出^{とびで}て来て、三橋^{みはし}の角で出会いました。

旦「おい師匠々々」

三「これは旦那………何方^{どちち}へ」

旦「此処^{こゝ}で君に遇^あおうとは思いきやだ」

三「先^{せん}達^{だつ}ては誠に有難う、あの時旦那がお歸りになったのを知らないで、御酒^{ごしゅ}を戴き過して、氣を許して寝てしまい、お歸りになった後^{あと}で目が覚めて驚きましたが、二度目にお目にかゝった時、寝たの寝の字もおつしやらないなぞでえのは、実に貴方^{あなた}のような苦勞をなすつたお方は沢山^{たくさん}無えって、蔭でのろけて居りますんで」

旦「君に惚^{ほれ}られちやア有難てえフ、」

三「からかつちやアいけません、何方へ入らっしゃいました、此の間お宅^{うち}へお寄り申そうと思ひまして参ると、番頭さんが何とか云いましたつけ、治平^{じへい}さんかえ、武骨真面目なお方で、呟^{うん}とお店に坐っている様子てえものは、実に山が押出^{おしだ}したような姿で、何となく

気がつきましたから、裏口から這入ってお内儀さんにお目通りを致しましたが、坊ちゃんは大層大きくお成んなさいましたな」

旦「彼は坊じやない嬢だよ」

三「へえお嬢さんでげすか、そう仰しやれば何処かお優しい品の宜いところが有りましたよ」

旦「何うも君は押付けたような事をいうのが面白い……君に出会ってこのまゝ別れるのは戦争の法には無えようだから、何だえ何処かでお飯を喰べてえが付合わねえか」

三「これは恐れ入りやすな、私の腹の空った顔が貴方にちゃんと解るなんてえのは驚きやしたなア、何うか頂戴致したいもので」

旦「君何処へ往つたのだえ」

三「なに少し大茂へちよいと」

旦「周旋かえ」

三「いえ然うじやア無いんですが、方々へ種々な会がありますと、ビラなんぞを誂えられてるんですが、御飯を召上るてえなら是非此処じやア松源さんでげしよう」

旦「松源てえは彼処で五六度呼んだ小しめだのおいとだのと云う好い芸者の中で、年若の

何とか云つたツけ、美代ちゃんかえ」

三「え、美代ちゃん、へえ美代吉」

旦「彼は好い娘だね、品が有つて実にお嬢さん然として居るね」

三「成程彼は旦那のお氣に入りましたよ、旦那は種々な真似をなすつて諸方で食散かして居らつしやるから、却つてあんなうぶなお嬢さん筋で無くちやアいけますまい、彼は極温順くつて宜うございますから、お浮れなすつちやアどうです」

旦「君は直に然う取持口をいうから困るよ、併し色氣は余所にして何となく何うも己は彼が慕わしいね」

三「美代ちゃんも然ういつて居ますよ、美代ちゃんも旦那の事ばかり蔭で褒めてまして、あんな好い旦那は無い、あの旦那に会うと何となく心嬉しいてツてます」

旦「なにお幫間を云つちやアいけない、あれは抱えか又娘分かえ」

三「あれは娘分なんでですが、彼処の婆ほど運の好い奴はありません、無闇に金ばかり溜めて高利を取つて貸すんですが、二月縛りで一割の礼金で貸しやアがつて、彼の位の者は沢山ア有りませんね、それが何うもあゝいう奴は娘を抱えると、直に美代ちゃんのお母が死んでしまうと、往き所の無えのを幸にずるゝべつたり娘に為ちまつたんですが、

あんな運の好い人はありやせん」

旦「何か情夫でも有るのかえ」

三「なにそんな者はありません、只温順しい一方で、本當にまだ色氣の味も知らない位で
 げす、付合で何処かへ往けなんてえと御免なさい、お母さんに叱られると云っている位
 なんで」

旦「何うかして彼の娘を呼出す工夫をして居るんだが、お母に取入つてお母と付合になつ
 ちまつてから、其の後彼の娘をお貸しな、上手へ往くとか、一晚泊で多摩川の鮎漁へ往こ
 うと云つても、若い者じゃア婆さんも油断はしめえが、此方は最う四十の坂を越えて居る
 から安心するだろう」

三「貴方上手なんぞへ連れてつて何うなさるんで」

旦「いやさ、彼の娘を連れてつて、情夫がある種を知つて居るから兩人しつぽり会わして
 遣ろうツてんだが何うだえ」

三「こりやア恐れ入りやしたね、何うもこれは出来ない業でげすな、ちよいと玉を付けて、
 祝儀を遣つた其の上で、情夫に会わして遣るなんてえ事は中々出来る事ぢやア有りやせん、
 間夫が有るなら添わして遣りたいてえ七段目の浄瑠璃じやアねえが、美代ちゃんに然う云

つたらどんなに悦ぶか知れやアしませんよ、旦那のことだから往渡り宜く家へ往つて然う云つたら、美代ちゃんのお母親さんも何んなにか悦びましよう、併し彼の婆は何うも慾が深えたつてなんて、彼んなのも沢山はありません、慾の国から慾を開きに來て、慾の学校が出来たら直に教員に為るてえ位な慾張で、あの肥つてるのは慾が肉と筋の間へからんで、慾肥りてえのは彼から初まつたでげす……じゃ美代ちゃんの家へ入らっしゃいまし」と三八が先に立ち数寄屋町へ這入り、又細い横町へ曲り、

旦「此方へ曲るのかえ」

三「此方へ入らっしゃい……え、此処で、有松屋という提灯の吊してある処で」

旦「法華宗なのかえ」

三「何でも金にさえなれば摩利支天様でもお祖師様でも拝むんで、それだから神様の紋散しが付いて居るんで……母親さん今日は、お留守でげすか……美代ちゃん今日は」

婆「あい誰だえ、安どんかえ」

三「あれが婆の慾から出る声ですが、酷いもんで……え、三八でげすよ」

婆「いやだよ何だねえ、ずっとお這入りな表からお客様振つてき」

三「御免なせえまし、へ、へ、今日は……」

婆「此の間はあれつきり来ないもんだから、わたしは本当に困ったよ、皆さんから後で話が有って……これからは持つて一々来て見せなくちやア困るじやアねえか」

三「ところが梅素さんの処へ往くと、びらが一ぺえ来てえるので、待つて書いて貰いましたんで、大きに遅くなつたんでですが、その代り美代ちゃんとはちゃんと中軸にして、そこらは抜目無くして置いた事は、後で御覧なすつても解りますが、時に今ね母親さん美土代町の奥州屋の旦那がね、ほんとに粹な苦勞人で、美代ちゃんを呼んで度々お座敷も重なると、家で案じるといけないから、ちよいとお母さんにあかして仲好に成りてえと仰しやるから、お連れ申して来ましたんで」

婆「あれまア何うもまア表に居らつしやるの……何うぞ此方へお上り遊ばして下さい、まことに思い掛けない事で、何うぞ此方へ……師匠此方へ案内してお上げ申しておくれよ」

三「へへ、此方へお上んなさいまし」

旦「はい御免……お母さんお初にお目にかゝります、毎度美代ちゃんを呼んで世話を焼かしますが、何うぞ心安く……」

婆「まア何うも宜く入らつしやいました、毎度また彼を御鼻屑に遊ばして有難う存じます、宜くまア此様な狭い汚ない所へ入らつしやいました、何時も蔭でおうわさばかり致して居

ますの、何うかして一度お目にかゝつて置きたいと思ひまして、師匠にも然う申しましたら、その内に案内をしようと云つてくれましたが、またお楽たのしみの処へ出ましてもお邪魔だろうからと存じて控えて居ましたが、毎度御鼈かめ屋様になりまして有難う存じます、あんな結構な袂たもと持もちや合切袋がつさいぶくろや金の指環など見たこともない物を下すつて、あれがお湯などに箆はめて参りますから、そんな結構な物を箆めてお湯に這入るのじゃア無いよ、金より其の上に善い物は無いからと云ひましても、今の若い者は開化とか何とかいう事を知つて居りまして、人のいう事をば些ちつとも聞かないで矢張箆めてお湯に這入りましたりして、ぞんざいに致しまして、何うも持もちぎつぺいが悪くて仕方がございません、お客様が折角のお志で下すつた物を、粗末にしたり落しちやア済まないよ、お志を無にするからと申ししましても、あの通り頑是がんぜがございせんから、何時までも子供のようでございまして仕方が有りませんが、何うぞお見捨なく何時までも御鼈かめ屋を願ひます、此の間もあなた遅く歸つて来まして、お母さんお案じでないよ、奥州屋の旦はか様が外ほかに何どんな無理なお客が有つても、十二時を打つたらずん／＼歸れと云つて下すつたが、そんなお客様は無いでツて何時も旦那様のお噂ばかり申して居りますので」

三「何なんしろ美代ちゃんをちよいと」

婆「今お湯から帰って、ちよいと二階で身化粧みじまいをして居ますよ」

旦「それは丁度好い所だった……師匠お母さんに其のオイお土産を………」

三「左様で………母親さんには是だけ……女中は慥たしか兩人ふたりでしたねえ……これは旦那から」

婆「まア何うも有難う存じます、何ぞ旦那様へ宜しくお礼を仰しやって下さいまし……旦那

それからは何うぞ何方どちらへ往らつしやいまして、御膳を上りましても詰らない御散財でござ

いますから、美代吉の所へ往つて惣菜で安く食べて往いこうと云うようにお心こころ易く、

ちよいく入らつしやツて下さいまし、然うすると此方こちらでも誠に気が置けませんで宜しゆ

うございますから、これを御縁として何うかちよいく入らつて下さいまし………お前

方皆みんな此方こちらへ来てお礼を申しな」

下「誠にどうも有難う存じます」

旦「いや何うもお礼では痛み入ります」

三「お母さん何か一寸お飯まんまもの物を色取りして何うか………」

婆「はい畏かしこまりました……ちよいとあの美代吉や下りてお出で、美土代町の旦那様が入らつ

しつたよ」

美「はい」

と返事をいたし、しとく階子はしごを下りて参り、長手の火鉢の前に坐りましたが髪が、結いい立たてでお化粧しまいの爲立したてで、年が十九故十九つゞや二十はたちという譬たとえの通り、実に花を欺くほどの美くしい姿で、にやりと笑い顔をしながら物数ものかず云わず、

美「よくお出でなさいました」

旦「今広小路で師匠に会ったからちよいとお母さんにお近附ちかづきに成ろうと思つて来たのさ」

三「美代吉さん、何うも私の方は慾でげすが、旦那の方は御厄介ごちがひになつて余り感心しないが、それを一緒に往ゆくと仰しやるのでお供をして此方こちらへ来たのてえのは、其処そこに種々御親切な話が有るんで、本当に後あとでお聞きかせ申したい事が有るんでげすぜ」

美「それはほんとに嬉しい事ねえ」

婆「今お土産を戴いたよ」

美「毎度有難う存じます」

三「何か旦那の召上り物を何うかお早く」

婆「此処こゝらでは鳥八十とりやそさんが早いから、彼処あそこへ往つて何か照り焼か何かで、御飯ごはんを上るのだから色取いろとりをして然う云つて来なよ、宜よいかえ、御飯うちは家のは冷たいから暖あつたかいのを三人前に、お香物こうくの好いいのを持つて来るように然う云つてくんな、あれさ家のは臭くくていけ

ないから、これさ人のいう事を宜く聞きなよ、それからお菓子を、なに落雁じやアないよ、お客様だから蒸菓子^{じょうし}の好いのを」

と下女に云附け、誂^{あつち}え物の来る内、何か有^{あり}物でちよいとお酒が出ました。この奥州屋の新助^{しんすけ}は一体お世辞^よの善い人で、芸者や何かを喜ばせるのが嗜^すきな人だから、何か褒めようと思つて方々^{ほう／＼}見廻したが、何も有りません。三尺の壁^{かべ}床^{どこ}に客の書いたものが余り宜い手では無く、春風^{しゅんぷう}春水^{しゅんすい}一時^{いちじ}来^{きたる}と書いてあり、紙仕立^{かみじだて}の表装で一幅^{ぷく}掛けてありますが、余り感心致しません。其の傍^{そば}の欄間に石版画の額が掛けてありますが、葡萄^{ぶどう}に木鼠^{きねずみ}の画^えで何も面白い物がありません、何か有つたら褒めよう／＼と思つて床の間の前を見た処が古銅^{こどう}の置物というわけでもなし、浅草^{なかせ}の中見世で買つて来たお多福の人形が飾つて有り、唐戸^{からど}を開けると、印度物^{いन्दもの}の観世音^{かんのん}の像に青磁の香炉があるというのでなし、摩利支天様の御影^{みえい}が掛けて有り、此方^{こつち}には金比羅様のお礼お狸さま、招き猫などが飾つて有るので、何も褒めようが有りませんから、二枚折^{ふたまいおり}の屏風の張交^{はりまぜ}を褒めようと思つて見ると、團十郎^{だんじゅうろう}の摺物^{すりもの}や会の散^{ちり}しが張付けて有る中に、たった一枚肉筆^{たんにく}の短冊^{たんさく}が有りましたから、その歌を見ると「背くとも何か怨みん親として教えざりけんことぞ口惜^くしき」という歌が書いて有つたのを見て、奥州屋新助は恟^{びつく}り致しましたと云うのは、自

分が二十四歳の時に放蕩無頼ほうとうぶらいで父も呆れ、勘当をすると云った時に、此の短冊を書いて僕に渡し、汝おのれの様な親に背いた放蕩無頼の奴は無いが決して貴様を怨みん、己おれの教えが悪いによつて左様な道楽の者に成つたのだ、此の短冊は己わが形見で有るから、是を持って何処へでも往いけと云つて、流石さすがの父も涙を含んで私の手に渡した時に、若氣わかげの至りとは云いながら手にだに受けず、机の上に置き去りにし、家うちを出た此の短冊が何うして茲ここに有ったかと、余り思い掛ない事だから驚いたが、素知らぬ体ていで、

旦「美代ちゃん、屏風に張つて有るあの短冊は何処から貰つたのかえ」

美「なに、あれはいけないですよ、張交はりませが足りないから何でも安どんが出せと云いましたから、反古ほごの中に皺くちやになつて居たのですが、あれは私わちきのお父さんとつが書きましたので」

旦「え…お前めえのお父さんが…何かえお前まえのお父さんは会津様の御家来で、松山久馬様と云つて七百石取つたお方だろうね」

美「あれまア旦那何うして私わちきの親父おやじを御存じなの」

旦「いえなに…わしは若い時分から歌俳諧が好きであつたが、風流の道というものは長崎はての果の先生でも、奥州の人とも手紙の遣り取りをして交際つきあいをするものだがね、久馬様

はおなくなりになつて、惣領のお兄いさまは上野の戦争で討死をなすつたということを知りたが、お母さんは未だ御存生かえ」

美「何もかも旦那はよく御存じですが、私は母と一緒に上野の先の箕の輪という処へ参りましたは、前々勤めていた家来の家で有りますから、そこへ往つて暫く厄介になつて居ます内に、母が煩い付きましたが、長煩い故病院へ入れる事も出来ませんようになったので、仕方なく私はこんな処へ這入りましたが、その甲斐もなく一昨年おとしの十一月なくなりましたよ」

旦「え、おかくれかい、それじゃアまアお母さんを救うためにお前は芸者になつて、云いつけもしない世辞をお客に云つて居るのだろうが、宜くまア親のために苦勞をして居るねえ」

美「はい、私は外わちきほかに親戚頼りも有りませんが、只ただ一人仲なかの兄のある事を聞いて居ましたが、若い時分道楽で、私が生れて間もなく勘当になつて家出をしましたそうですが、随分気性な人ゆえ戦争にでも出て討死もしかねない気性ですから、大方死んでしまつたらうと常々母親おふくろが申して居りましたが、その兄さえ達者なれば会う事も有りましようが、尤も小さい時に分れたのでございますから、途中で会つても顔は知れませんが、何

卒^{うぞ}して生きて居るなら、その兄に会いたいと思ひまして弁天様へ願掛^{がんかけ}を致して居りますけれども、いまだに知れませんか、本当に私は独りぼっちでございます」

旦「然うかえ、お前が生れて間もなく分れた兄^{にい}さんだから、顔形も知れまいが親身の兄と思えばこそ然うやって神信心^{かみしんじん}をして会いたいと願掛までして居ればこそ、ふといやなに……屹度^{きつと}会うような事になるに違ひないが、その事を兄^{あに}さんが聞いたら嘸^{さぞ}悦ぶだろう、然うかえ……どう云うわけだか松源へ初めてお前を呼んだ時から、何となく私^{わし}の子のように思われて可愛いと思つたが、妙なものさね」

三「へえ美代ちゃんは今馬様のお嬢さんなんですか、道理で初めから今馬様の相が有りましたよ、何かその遊ばせ言葉などの所は違^{ちが}へえねえ、成程七百石のお嬢さまなんで……」
旦「私^{わし}はお前のお父さんには歌俳諧の道で御最^ご真^まになったこともあり、十九年振でお前に会うとは誠に妙だ……師匠何うも妙だな」

三「まことに妙でげすね……併^{しか}し何だか大變に陰氣になったじやア有りませんか」
旦「どうか此の娘^こを身請^{みうけ}を致^{いた}し度^たいものだ」

と是から美代吉の身請の相談に及ぶ。これが一つの間違ひに相成るお話でございます。

二

奥州屋新助が、美代吉を我が実の妹いもとと知りまして身請の相談に及びましたが、娼妓の身請はよく有りますけれども、芸妓の身請は深川ばかりで、町芸妓の身請という事は余り昔は無かつたものでございますが、開ひらけて来るので当時は身請が流行でございます。

新「おい師匠々々」

三「へえ」

新「ちよいとお母つかあに君から相談して貰いてえな、何と此の娘こを身請えしてえんだが、馬鹿な事を云われちやア困るんだ、大て概え相場も有るもんだが、何うだろう、身請をするには何のくらのものだろう」

三「それは何うも大變に芝居が大きくなつて来ましたね、この娘むすめを身請なえ為なすつても御妻ごさい君の方は」

新「なに僕がこの娘を受出して権妻ごんさいにしようてえ訳じやアねえが、あの娘のお父とつさんには、昔風流の道で別懇にして御恩を受けたこともあるし、親戚みより頼りもねえという事だから、あの娘こを身請して、好いた男と添そわしてやつて松山という暖簾のれんでも掛けさせて、何処かへ

別家を出して遣りたいのだ、そして久馬様の御位牌を立てさせたいと思うが何うだろう」
三「恐入りやしたねえ、何うも御親切の事で、へえ…併し貴方の御親切を先方で買うと宜いけれども、彼の婆アが中々慾が深いから買いませんで、大きな声じゃア云えませんが、あの通り慾で肥^{ふと}つてくるくらいなんですから、身請となると何んな事を云出すか知れませんよ」

新「だからサ、親類交際^{づきあい}でおめえから話をしておくれな」

三「へえ、兎に角一つ話をして見ましょう……お母^{つか}さんく」

婆「はい」

三「ちよいと少し此方^{こつち}へお出でなすつて、へへへ、旦那の前では話し難^{にく}いんで」

婆「厭だよ三八さん、こんな婆^{ばい}を蔭^あへ呼んで何をするんだよ」

三「ときにお母さん、外^{ほか}じや有りませんが、今旦那がね、美代ちゃんのお父さんと心安くして、むかし御恩になった事もあるてえので、美代ちゃんを身請して松山とか久馬様とかいう暖簾^たを掛けさせ度^たいッてんで、何も色に惚れて権妻にするてえような訳では無いので、親類交際の身請てえのですが、これは私も思うのにお前の為になると考えます、あの方の事だから身請^しを為^なッ放^{はな}してえ訳じゃア無いのだからお前も思い切ってお仕舞いなさい、

併し^{しか}盛りの娘を手放すつてえのだから無理だが、後の^{あと}為を考えるとね、実は私もちよいと旦那と打合^あわした処も有るから、思い切つて美代ちゃんを手放して下さいな、娘が出世すると思えば否^{いや}という訳は有りやすめえ」

婆「まことにどうも有難うございますね……旦那ア本当でございますか……、何だか三八さんは時々おかしな事を言出しますすが」

新「実は今師匠にも話したんだが、あんまり贅沢^{ぜいたく}のようでお母さんきまりが悪いが、初めて会つた時から何^なんとなく美代ちゃんが可愛くつて仕様が無いから云出したのだが、併し話をするのは今日^{けふ}が初めて、何うかしてお父さんのお位牌でも立てさせたいと思い、また私は別に兄弟も何も無いから、此の娘を請出して私の妹^{わが妹}分^{ぶん}に為^したいというは、此の娘の様な真実者なら、私の死^{わし}水も取つてくれようとこういう考えなんだが、親類交際^{きんれいこうざい}で身請^{きつと}を為てしまつたからつて、何も是^{これ}切^{きり}お前の処へ来ないという訳でも無く盆暮^{ぼんぼ}には屹度^{きつと}顔を出させるようにします、差^{さしつかえ}支^しは有りますまいが、また斯^こういう雛妓^{こども}を抱^たえ度^たいか、あゝいう出物^{でもの}の著物^{きもの}が有るから買いたいと云う様な時にも、お前さんの事だから差支^{さしつかえ}も有るまいが、然^そういう時には金^{きん}円^{えん}……また私が御相談^{ごたん}をしても善いのだがねえ」

三「旦那が只何うも美代ちゃんが可愛くつて、娘か妹のように思われて、丸めて喰^くツちま

い度^たい位^いなんで」

婆「誠に何うもそれは有難い事でございます、実に彼の身^あの出世でございます、彼も何時までも芸妓をして居ては詰りませんから、能^よい加減な時分に何うか身を固めさせなければならぬと申して居たのでございますが、昔は芸妓を受出すにも造作も無い事でございましたが、今では身請というと実に方々^{ほう／＼}さまの相場が大変な事で……」

三「ほうらそろ／＼始まった、これだからうっかりした事は云われない……お母さん然う前置から詞^{ことば}を振^ふずに前文無しで結^け著^{ちやく}の所を云つて下さらなくっちゃア困りやすで……旦那あなたの思^{おも}召^{めし}は」

と袂^{たもと}の中へ手を入れて、指を握り合つて相談をする。

三「えゝ、成程……お母さんちよいと手を私の袂^{たもと}の中へ突^つ込んで下さい、これが流行物だから何うでげしよう、このくらいでは」

婆「はい……誠に有難い事でございますけれども、お師匠さん、私どもは外に宜^いい抱えも無いのでございます、今美代吉が出てしまえば、何れ誰か外^{ほか}に宜^よい抱えを為^しなければなりません、そんならばと云つて出たから直^すにお客が附くという訳でもなし為^しますから、それでも何うも少し話が折合いませんねえ」

新「じゃお母さん何うぞ五百円ぐらいの所で話を極めておくんなさいな」

三「お母さん、そんなら宜うございましょう、こんな相場は有りませんから」

婆「誠に何うも有難い事でございます」

新「僕も少し頼まれた事が有つてその実は横浜まで買物に往かなければならんから、それでは明後日という事に極めましょう、何が無くとも赤の御飯ぐらい炊いて、目出度い事だから平常馴染の芸妓衆でも招んでね」

婆「誠に何うも有難い事で、然んなれば是非明後日はお待ち申します……美代吉や、ほんとに御親切なんて、何うもこんな有難い事は有やアしないよ……お間違ひ有りますまいね」

新「間違える所じやない、お母さんの方でさい違わなけりやア、此方で約を違える氣遣いは無いのだから」

婆「実に何うも有難い事で、左様なら明後日は何時頃に入らつしやいます」

新「二時少し廻つた時分迄には屹度来るから、其の積りで約定を極めてさえ置けば宜いのだ」

三「美代ちゃん大変に宜い事が有るんで」

と幾ら傍で云つても美代吉は少しも嬉しい顔付が無いというは、本所北割下水に旗

たもと
下の三男で、藤川庄三郎ふじかわしょうざぶろうという者と深くなつて居ますが、遣い過ぎて金が廻らなくなつたので、有松屋へ行つても不挨拶ふあいさつをするゆえ来にくくなり、何うも都合が悪いと見えて、茶屋小屋から口を掛ける事もなし、此の頃では打絶うちたえて逢いませんので、美代吉も氣を揉んで居る処へ身請の話になり、胸が痛く、

「はい」

と忌いやな返事をしました。所へ来ましたのは藤川庄三郎で、此の頃では深川六間堀ふかがわろっけんぼりへ蟄息ちっそく致して居ましたが、駿府すんぶから親族の者が出て来まして、金策が出来、商法の目的を附つけ、何んな所どへでも開店し為ようという事に成りましたので、美代吉に悦つばせる心算つもりゆえ大めかしで、其の頃散髪ざんぎりになりましたのは少なく、明治五年頃から大して散髪ざんぱつが出来ましたが、それでも朝臣ちようしんした者は早く頭髪あたまを勧められて散髪ざんぎりに成立なりたてでございます

が、また散髪に成つて見ますと、この撫付けた姿を見せたいと、惚うれている女には尚變のぞつた所が見せたく、黒の羽織しろちりめんに白縮緬へこおびの兵児帯で格子の外へ立ち、家の中うちを覗のぞきながら小聲こゑにて、

庄「美代ちゃん宅うちかえ」

と声を掛けると、美代吉は庄三郎の事ばかり思っています処へ、想う男に声を掛けられ、

飛立つばかりいそ／＼しながら、

美「あい」

と立上るを引き止め、

婆「何だよ、お止しよ、お前お客様が来て入らつしやる処で、藤川さんだろう、止しなよ、お客様が入らつしやるから余計な事を云いなさんなよ、出なくつても宜いんだアね」

新「お母さん宜いじやアないか、前に鼯肩で呼んでくれたお客なれば、今美代ちゃんを請出せば私の妹分にも為しようと思つている、その妹を鼯肩にしてくれたお客なら私もお近付になりたいから、お上げ申した方が宜い」

美代吉は逢いたいと思う処へこう云われたから、

美「はい」

と直に二畳の上り口へ出て来まして、障子を開けるとて格子の外に立つて居まする庄三

郎を見て、莞爾と笑いながら、

美「おや宜くおいでなさいました」

庄「今日はね、少しお前に悦ばせようと思つて来ました。」

美「余まりおいでなさらんから何うなすつたかと思つてましたよ」

庄「なにね深川の方の知己ちぎの処に蟄息して居たが、遠えんしゅう州の親族の者が立帰って来て、何か商法を始めようと思うのだ、それに就いて蠣かき売町に宜い家うちが有るから、その家を宿賃で借る積かりつもりで、品は送ってくれると云うから、その家で葉茶屋はぢやを始める事になったので、実は母親おふくろに打明ぶちあけました、云い難にくかったが思い切つて、実は斯これく々の芸妓が有りますが、あれは腹から芸人じゃア無い事は会津藩の斯々という者の娘でと、すっかりお前の身の上を明した処が、そういう身柄の者なら宜しい、何うせ一人嫁を貰わなければならんから、早く儲けて金が出来たら、お前を貰うように約束して置くが宜いいとまでの話になったから、お前に悦ばせようと思つて来たのさ」

美「それはまア嬉しい事……種々いろくお話も有りますから、ちよいとお上んなさいよ」

庄「お客かえ」

美「なに私わちきのお父さんと心安い人なんで、四五度私たびを呼んでくれた人ですが、宅のお母さんと近付に成りたいいつて来てえるんですよ」

奥から声を掛けまして、

新「何方どなたですか此方こちらへお上りなさい、お客でも何でも有りませんよ、親類のもので……
おい師匠お前ちよいと彼あのお方を此方こつちへ」

三「へえ……先此方へお上りなさいまし、一切親類付合で、今ちよいとお酒が始まつた処で、これから美代ちゃんのお兄さまになるお方で、へへ、何うぞ此方へ入らっしゃいまして……へえ何うも是は玉柄で、このくらいなステッキは有りませんな、何うも一切違いやすね……さア此方へく」

庄「はい何方も暫く……えーお母ア誠に御無沙汰をしました、少し訳が有つて深川の方に引込んでいたので、存じながら御無沙汰になりましたが、今ちよいと御近辺まで参つたから、お訪ね申しましたが、生憎な処へ来てお邪魔をしました」

婆「え、お茶を上げな……あなたにも此の娘が度々御鼻眞で呼んでおくれなすつた事もありますが、明後日から美代吉は宅にいませんよ、こゝに入らっしゃいます美土代町の洋物屋の旦那様が身請をして下さいますので、こんな子供の様なものでございますけれ共、可愛がつて身請して下さい、大金を出して引かして下さい、貴方のような何じや有りませんが、随分中には風の悪いお客が、玉の五つ六つも附けて祝儀の少しも出すとね、上手へでも連出して色男振つて、ほんとにあなた然うじやア有りませんか、私も心配した事も有りますよ、明後日からおいでなすつた処が婆アばかりで面白くも何とも有りませんよ」
と云い放たれ、庄三郎顔の色を変え、

庄「むゝ左様か…」

と云つたぎり、ぐいと癩癬かんべきに障りました、これが奥州屋新助の大難と相成ります。

三

藤川庄三郎は、あれ程深く云い交して置きながら、身請をされるというに今まで一言の言葉もなく、手紙一本送らんで、無沙汰に身請をされるというは不実な女だと思ひますと、そこは旗下の若様だけ腹に据兼ねすえか、ぐいと込上げて来ると額ひたえに青筋が二本許り出ばかまして、唇がぶるゝ震え出し、顔の色を少し変え、息遣いも荒く、

庄「お母アつか、何も然そんなに云わないでも宜いい、余あんまり久しく無沙汰になったから訪ねたのだが、お客様が入らつしてお邪魔になつたら帰りますよ、何も然そんなに薄情な事を云わないでも宜いい……美代吉お前めえが身請になる事は少しも知らなかったが恐悦だねえ」

美「あれさ身請たつて、まだ今話があつたばかりで決りもしないのに、あんな事を云つて」
庄「なに宜しい、まことに恐悦だ、洋物屋とうぶつやだか乾物屋だか知らねえが、誠に結構だ……
何方どなたも甚だ失敬」

新「まア宜しいじやアございませんか、お母つかあの云いようが悪いから誰おこでも怒おこらア、美代吉種々いろいろ是には話の有る事だから、後で私わしから話をするから、お前まへ往いつてあの方の機嫌を直して帰かへすが宜いい」

美「はいく」

とおどくしながら庄三郎の出かゝる上り口まで参りまして、

美「ちよいと藤川さん」

庄「なぜ出て来た」

美「出て来たつて今身請の話が始まつたばかりで、何だか訳も解らないのに、あんな事を云つて、色でも恋でも有りやアしませんよ、私わちきのお父さんを歌俳諧つぎあいの交際つきあいで知つて居るから、身請をして妹分きぶんにして、松山の姓を立てさせて遣り度いつて今話があつたばかりなんですのに、氣前きぜんを悪くして腹を立てはいけませんよ」

庄「なに僕は悪い処ところへ来きましたよ、他の芸妓と違つてお前は会津藩でも大祿たいろくを取つた人の娘だから、よもや己おのれを騙だますような事は有るまいと思つたから、一昨日おと、い母にも親族にも打ぶ明ちあけたのは僕が過あやりました、お前はよく今まで己おのれを騙だましたね」

美「騙だます訳も何も無いんです、今急に身請の話が出たのですもの」

庄「身請に成るなら本当に手紙の一本位よこしてもいいんだ、もう親族にまで打明^{うちあ}け、此^こ方で身請をしようという話がつけば何^どの位金を出すか知れんが、手前^{てまえ}だって親族も有るからそれだけに為^しねえことはない」

婆「何だえ、その音は、何うしたんだえ、そんなに機嫌を取るから悪いんだ、機嫌を取りやア宜^いい気になつて、色男振りやアがつて、人の家^{うち}の娘を打^ぶったり叩いたりしやアがる、全体おかしな奴だ、他人^{ひと}の家へつかゝ這^へ入つて、お茶ア飲んで菓子を喰倒しやアがつて、ほんとに風の悪い奴だ」

新「師匠美代ちやんが泣いて居るから見て遣んなよ、お母の云いようも悪い」

三「旦那御心配なさいますな、彼^{あれ}じやアちよいとグーツとちんくが込^こみ上げて来ます、ばかりとステツキで打^ぶつたんでげすが、本当に素^す敵^{てき}もないことで」

新「ムン何んだ洒落どこじやアねえ……美代ちやん泣いたつて仕様がな、こゝへお出で、泣かないでも宜^いい、藤川さんだろう、聴いて知つて居るから後で兄^{にい}さんが挨拶を……今から兄さんと云うのは可笑しいが、会つて話をすれば、屹度藤川さんの心持も解けようから」

婆「なに宜^いい、あんな者に上^{じょう}手^ずを遣^{つか}うからいけねえ……あなた本当に此^この娘はお客の前へ

出るとはらくする性質（たち）でいけません、あんな小悪（こにく）らしいぎすくした奴は有りません」
 新「お母さんの云いようも悪かったよ……お前泣（めえ）いたりしちやアいけない、ムウ大層降出して来たな、雨の音が聞えるが、こいつア困ったな。浜まで明日往（あしたい）くにしても、帰らなければ都合が悪いから、人力を一挺（いっぴつ）云附（いっぴつ）けておくれな」

婆「はい……併（しか）しまア宜（よ）いじやア有りませんか」

新「いや少し頼まれた事も有るので、是非浜へ往つて買物を為（し）なければならんから」

婆「然（そ）うでございますか、それじやアはるや、大急ぎで車を誂（あつら）えなよ、仕立は高いから四つ角へ往つて綺麗そうな車を見つけて来な、幌（ほろ）の漏らないようなのを、大急ぎで早く往つて来な」

下女「はいく」

と下女が有松屋と云うぶら提灯（さ）を提げて人力を雇いに往（い）きますと、向うからがたく帰
 り車と見えて引いて参るを見付け、

下「ちよいと車屋さんく」

車夫「へい」

下女「あの神田の美土代町まで幾許（いくら）だえ」

車夫「へい一朱と二百で」

下女「高いよ、そんな事を云ったツて余あまり高いよ」

車夫「高いたつて降つて来ましたから」

下女「降つて来たつて、お負けよ、一朱ぐらいに」

車夫「ヘエ何うでも宜うございます」

とフランクツトを身体に巻附け、ずぶ濡になつてゐる車夫が、下女の後からびしょく

附いてまいる所を、藤川庄三郎は丁字風呂の蔭に隠れていたは、愚痴な女に男の未練で、

腹立紛れに美代吉を打ぶん殴つて出たが、まだ腹が癒えず、何うも身請をされては男の一分ぶん

が立たんと、旧もとの士族さんの心が出ましたから、小蔭に隠れて様子を立聞くと、奥州屋新

助が美土代町へ帰るようだから。

庄「ムウ彼奴あいつが美土代町へ帰るならば宜しいたゞア置くものか」

と煙管きせる筒に合あ口くちを仕込んだのを持つて居ます。今新助が車に乗る様子を見てみると、

表までどろ／＼送り出し、

皆々「左様ならば、左様ならば」

婆「何うぞ明後日あさつてはお待ち申して居りますが、何時頃なんどきごろおいでになりますか」

新「二時頃には来る積りだよ」

婆「是非おいでを……ちゃんと掃除をして置きまして、皆子供たちにも話を致して置きます、左様ならば御機嫌宜しゅう……車夫さんくるまや氣を附けて成りつたけ早くお頼み申しますよ」

車夫「早くたつて歩くだけにしか歩けません」

婆「人の悪い車夫だよ、ぶら／＼歩かれちゃア仕様がない」

車夫「そんなに急がなくても車が廻るから自然ひとりに往いかれるんで」

婆「それじゃア車を引くのじゃアない、車に引かれて往ゆくのだ」

新「そんな野暮なことを云うな……ムーン破けてるひどい前掛だなア、愛敬ねの無え車夫だね……車夫さん幌は漏りやアしないか」

車夫「大丈夫で」

と是から梶棒の先を掴まえて慣れない奴が持上げて、ごろ／＼引出したが、何うも思うように走りません。

車夫「はい／＼」

幾らか頂戴したら早く引きますと云わぬばかりに故意わざと鈍のろく引出し、天神の中坂下なかざかしたを

突当つて、妻恋坂を曲つて万世橋から美土代町へ掛る道へ先廻りをして、藤川庄三郎は、妻恋坂下に一万石の建部内匠頭というお大名が有ります、その長家の下に待つて居ましたが、只今と違つてお巡りさんという御役が有りません、邏卒とか云つて時々廻る方が有つた時分で、雨はどつと降出して来ましたから、往来はぱったり止つて淋しい秋の雨で、どんく降る中をのたくやつてまいる所を、待伏をして居りました庄三郎が、いきなり飛出して提灯を斬つて落す。

車夫「あッ」

と梶棒を放して車夫が前へのめつたから、急に車の中から出られません、車夫は逃げようとして足を梶棒に引掛け、建部の溝の中へ転がり落ちる。庄三郎は短刀を振翳し、庄「覚えたか」

と突掛けて来ますと、覗い違わず奥州屋新助の脇腹へ合口を突き通すという一時に手違いになりますお話でございます、一寸一息継ぎまして後を申上げましょう。

えいさて私は夏休みの中、相州箱根から京阪の方へ廻って、久しゆう筆記を休んで居りましたが、申続きの美代吉庄三郎の身の上、奥州屋新助の事が大分に後が残って居りますこれは明治四年のお話でございます。明治四五年頃は御案内の通り頓と未だ開けない世の中では有りますが、漸くに明治五年に此の散髪が流行りまして、頭を刈る時にも厭がつて年を老った人などが「何うか切りたく無い、切るくらいなら、寧そぐりく」と剃こぼつて坊主になった方が善かろう」それを取ツ攫まえて無理に切るなぞという、実に厭がりましたものであります。ところが只今では切らんければ恥のような訳で、実に昔切り立てには何故いやな彼んな頭をするか、厭らしい延喜のわりい、とよく笑いましたものであつたが、散髪が縁起が悪い頭だか、野郎頭の方が縁起が悪いのかとんと分りませんが、先達博識の方に聞いたら、前を剃りましたのは首実検の為に剃ったので、大将へ首実検いたさするに指を髻に三本入れた時に（右の手にて攫む）斯う髻を取つて大将の前に備える時に死顔が柔かに見える、前が剃つて有ると又髻を掴むにも掴み易いと云うので、前髪を剃上げて見せたということだから、以前の頭は余り縁起の好い頭じやアございません、首実検のための頭だと云います、それから追々剃りまして糸髻奴が出来ましたが、清元本多と申して幫間やなんかは石垣に蜻蛉の止つたような頭に結いましたもの、

只今では散髪さんぎりに成つたから、風ふうの姿すがた様が有りませんが、此方こちら（右）に曲まげるとか、或は左の方に撫付けたが宜よろかろう、中央まんなかから取つて矮鶏ちやぼの尾おしりの様な形なりに致いたして粹すいだという、團十郎刈だんじゅうろうがりが宜よろいとか五分刈ごぶがりが彼あれが宜よろい、粹いきな様だが團十郎刈だんじゅうろうがりと云うと、大層名はやりが善よいが、よく／＼見れば毬いかり栗坊主くりぼうずだから悪く云つたら仕方の無いもんだが、あれが流行はやりと成ると粹に見えます。今では前の方にばらリツと下つたのが流行ります、あれはまア乱れて下つたのかと思うと結髪床かみいどこでの誂あつちえです、西洋床の親方さかなんぞは最もう心得て居りますから、先方むこうから、

床「どの位に……」

客「前の方に五十六本」

なんて申したつて分りません、仮令たとえ長く下げまして、末には目の上にまで被かぶさつて、向うが見えないように成つて、向うから人が来て、

甲「今日は」

乙「へい（髪を両手にて搔上げ右左と顧かえりみる）え、何方どなたです」

なんてえ訳で、両方の手で分けて見たり何かなんするのは可笑おかしゆうございますが、其の頃は散髪さんぎりに成つても洋服を召しても、未だ懷中ふところには煙管筒きせるづゝの様に、合口の短刀を

一本ずつ呑んで居おつたものの、されば徳川の禄を食はんだ藤川庄三郎、ことには若様育ち、あれ程にまで云いかわし、惚れた美代吉を身請をされては何うも友達へ外聞が悪い、親や親戚に打明けて身請までにと申つた処を他たへ買取られては一分いちぶん立たん……と云う血氣にはやつて分別も無く、妻恋坂下の建部内匠頭の窓下に待つて居るとも知らぬ奥州屋新助が、十九ヶ年振りで真実の妹いもとに遇あい何うか身請をして松山の家を立てさせて、思う男の藤川庄三郎に添くわしてやりたいと腹で種いろく々に考あさえて、明後日は身請をする心持で車夫しやふを急あがしても、車夫くるまやは成りたけのろく挽ひいて、困ると酒手が出たらそれから早く挽ひこうという、辻車は始末にいかない。幌が少し破れて、雨がぼたりくくと漏ります。梶棒の尖とつさき端だしぬけを持つてがたたく揺ゆるがせて、建部の屋敷裏手までまいると、藤川庄三郎曲り角の所から突然だしぬけに車夫しやふの提灯を切つて落した。車夫は驚いて、どーんと筋斗もんどりを打つて溝の中へごろくんと転うがり落ちましたが、よい塩梅あんばいに車かえが反りません、機はすみで梶棒が前に下りたから、前まえど桐油うゆを突き破つて片足踏み出すと、

庄「思い知つたか」

と組附くように合口を持つて突ツ掛りまして、ちやうど奥州屋新助の左の脇腹のところをぶつうりと貫いた。

新「うゝん」

と云いさま、此方も元は会津の藩中 松山久次郎 … 聊か腕に覚が有りまするから、庄三郎の片手を抑えたなり、ずうんと前にのめり出し。

新「暫くく逸まっちやア成りませんぞ」

庄「なに宜く先程は失敬を致したな、一分立たんから汝を殺し、美代吉をも殺害して切腹いたす心得だ」

奥「暫くく何うぞ …… 逸まつた事をして下されたなア藤川氏 …… 手前は美代吉の色恋に溺れて身請を致すのではござらん、美代吉の真実の兄で松山久次郎と申す者でござるぞ」
庄「へい、なに松山 …… 美代吉の兄とはそれは又何ういう訳」

奥「フムそれは …… まだくく …… あッあ斯く成り行くは皆な不孝の罰である …… 手前二十四歳の折に放蕩無頼で、元の会津の屋敷を出る折に、父が呆れて勘当を致す時に一首の歌を書いて、その短冊を此の久次郎に渡された …… それより青森へ参つて、北海道へ渡つて、暫く函館地方に居つたが、時治まつて横浜に出て参つて只今では聊か活計の道を立て …… これから僕も世に出ようという心得であつた …… 先達て五六度呼んだ美代吉が、何となく温順しやかな身柄の宜しい者である、武士の娘と云う事を聞いたが、時世と

て芸者の勤め、皆な斯様に成り果てた者も多かろうと存じて……手前妹と知らず、鼻根にして五六度呼びました……すると美代吉はあなた様と深く云い交してある事を他の芸者から聞きましたゆえ、何うぞして配わして遣りたいと、今日美代吉の宅へ参つてふと見たる屏風の貼交ぜ、その短冊を見れば、父が勘当の折に書いてくれました自筆の……歌でございます……その短冊から段々問ひ合せますと、松山久馬の娘である、父も兄も相果て、母が病中斯様な処に這入つて芸者を致すとの物語を聞き、あゝ己は不孝で、二十四歳の折家出をして、両親に聊かも報恩を致さんで、年はもいかぬ女の身で斯様の処へ這入つて芸者を致して居るか、如何にも不便な事であると存じました故に、何うぞ美代吉を身請致して別家を為し、松山の名跡を立てさせたい、殊には貴方様と何うか御相談の上で、不束な妹では有るが、女房に持つて貰いたいと存じて、今日身請を致し、明後日は貴方様をお招き申して、何うぞ妹の身の上をも善きに願おうと心得て居ったところが、貴方様がお出でになつても、有松屋の婆が居るから何一つ御相談も出来無い、貴方が思い違いを致して御腹立でお歸りの時も、私は心配して居ったが、まさか手前にはアツはア……斯様な荒々しい事をなさろうとは思わなかつた……併しそれ程までに妹を思召して下さる御心底はアツはア……誠に忝けない、手前此処に金円を所持して

居る……此の五百円の金を差上げるから、わが亡ない後あとに妹をお身請なされて、他ほかに親戚兄弟も無い奴と何うかお見捨て無くはアツはア……末々まで女房に持つて遣つて下さるよう願いたい、こゝに金きんが有るからお渡し申す……エお分りに成りましたか」

聞く事ごとに庄三郎、

庄「はあア左様な事で有ったか」

と。只茫然といたして、どつどと降る中にべた／＼と坐った。

庄「左様とは心得ませんで……どうも誠に失敬（失敬たつて殺しちまつては間に合ひませんねえ）何うかお助かりは……」

奥「えいや助からん」

と苦しい中で懷から金かねを取り出し、

新「……五百円、それに此の金きん側がわの時計も別しるしして記のある訳でない、お持もちりよう料になされて下さい、他ほかの物は記が有りますから……此処にあなた様が居ると、もし夜廻りの者が参つては相成りませんから、お早く往つて、何うぞ早く往つて下さい……急にお身請になると感付かれると成りません、一二ヶ月経つてからでございませ、お早く／＼」

早く／＼という声も最う息も急せわしゆうなります様子。此の頃は巡査という役もござい

ませんけれども折々は邏卒という者が廻りました時分で、雨は降りますけれども妻恋坂下、何う成るか此方こちらも怖いのに心こゝろ急いそくから、其の儘に藤川庄三郎は、五百円と時計と持って御成街道おなりかいどうの方に参りますと、見送った新助は血のりに染つたなりひよろ／＼出て、向うの中なか坂下について、あの細い横町よこちょうの方に参り、庄三郎に突かれたなり右の手を持ち添そえて、左から一文字にぐうツと掛けて切つた、此方こつち（左）の疵口きずぐちから逆に右の方へ一つ搔か切つて置いて、気丈な新助、咽喉のどを一つぶつうりと突いて倒れました。左様なことは些ちつとも知りませんのは奥州屋新助の女房、昨夜は新助が帰らんと云うので、

女「旦那さまがお歸りが無いから、早くお前店を開けて、万事氣を附けておくれ」

福松ふくまつという店を預かつている若者が指図をして、店の飾り附をして居ると、門口へ来ました男は穢きたないとも穢きたなく無いとも、ぼろ／＼とした汚れ切つた毛布けつとうを巻き附けて、紋羽もんばの綿頭巾を被つて、千草ちくさの汚れた半股引を穿はき、泥足草鞋わらしばき穿の儘洋物屋とうぶつやの上り端あがはなに来て、

男「御免を蒙こうむる」

福「今其処そこへ来ちやアいけない……来ちやアいけない……今店を出す処だに、何だい」

男「何だつて人間だい」

福「冗談云うねえ、今店を明けたばかりの処で其処へ突立^{つた}つて邪魔して居ちやアいかん、何だア錢貰い」

男「失敬極まる事をいうな……これ錢貰いとは何だ……さ当家の家内に逢いたいんだから是れへ呼んでくん……おふみを是れへ呼べ」

福「何うもこれは何だろう……お前は一体何処のものだい」

男「何処も何もあるものか、人力車夫の徳藏^{とくぞう}という者だと云やア解るから呼んでくれ」

福「呆れて物が云われない、何だつて車^{くるま}夫^やが此処に来てお内儀^{かみ}さんに逢いたいてえのは何ういうわけだ……何ういう縁故をもつて云うのだ」

徳「縁故の無い処に云うものか、当家のふみと血を分けたお兄^{あにい}さままで大西徳藏という者だと云やア分る」

福「はゝあ是れが兄貴のわんちゃん者だ」

と番頭も分りましたから、

福「今お内儀さんはお加減が悪くて寝^{やす}んで居ります……誠にお生憎^{あいにくさま}様で」

徳「なにお生憎様てえ事が有るものか、塩梅が悪きやア奥へ通つて逢おう、盥^{たらひ}へ水を汲んでくれ、足を洗うから」

福「困りますナ何うも、今何うも店の処じやア困りますからよ、暫くお待ちなすつて」

徳「待たなくてよ、逢いに來たんでい」

というに仕方が無いから、番頭は奥に往きますと、乳児ちのみごに乳を含ませて、片手で其処此処片付けて居りました。

福「申しお内儀さんえ」

ふみ「はい」

福「あなたのお兄あにいさんで徳藏様が」

ふみ「あゝ又來たかい」

福「へいぼろ／＼したお装なりで………あなたの前で申上げては済みませんが、実にひどいお服装みなり、御酒ごしゅの上の悪いてえことを聞いて居りますが、私は存わたくしじませんから、何だかと思つて、錢貰いならアノ店を明けたばかりだから、其処へ立つちやアいけないと云つたら、あべこべに劍突けんつくを食つて、兄上いもとが妹に逢うのだと申しますが、御様子が悪いから……」

富「あの店に置いちやア困るから、台所で逢うから此方こつちへ呼んでおくれ」

福「へい………貴方さまお内儀さんがお目にかゝりますが、足を洗うのも始末が悪うござい
ますから、裏からお這入りなすつて………直すくに其の蠟燭屋の裏をお這入りなさると井戸の前

の処が入口でげすから」

徳「いや店から上つて悪いという次第もないけれども、併しながら何処から上つても五分だ……大層代物しろものが店に殖えたな」

福「何うもまことに仕入が間に合いませんで」

徳「なんだア、汝てまえなんどは生利なまぎきに西洋物を売うり買かいいたすからてえんで、鼻の下に髯ひげなんぞを生はやして、大層高慢な顔をして居ても、碌になんにも外国人と応接が出来るという訳じやアあるめえ」

福「そんな事は兎も角も、お内儀さんがお目に懸るつてますからお早く」

徳「あゝうい此家こちらア裏ア何処だ……裏ア」

ぱたり／＼と此方こつちの羽目に打突ぶつかり、彼方あちらの壁に打突かつて蠟燭屋の裏に這入り、井戸端で。

徳「此処か、奥州屋の新助の宅たくは此処かな」

ふみ「お芳よしや、そこ開けて遣つておくれ……此方こつちだよ、此方へお這入りなさい……あらまア穢なりい服装でマア、またお出でなすつたね」

徳「又だア……其の後は打絶うちたえて……御無音ごぶいんに……何時も御壮健おかわりも無く……大西

徳藏たいえつ大悦奉る」

ふみ「何だね困りますね、朝からお酒を飲んで、お前さんは始終は身体を仕舞いますよ」

徳「何うせ果は中風ちゆうふうだ、はゝゝだが酒が一滴も通らなけりア口の利けねえ徳藏だ、予かねて

お前も知つてゐる通りのことだ、前々勤務まえくつとめをしている時分にも宜しく無いから飲むなてえが、

飲まんけりア耐たまらん、殊更寒い昨夜ゆうべは雨が降り、斯かくの如く尾羽打枯おはうちからして梶棒つかに掴はまって

歩るいたつて、雨で乗手が少ない、寒くつて耐らんから酒を飲むと、自然と車の輪代はだいがた

まって、身代もまわりかねるような事に成つて、はゝゝ如何んとも何うも進退きわ谷きわまってね、

誠に済まんけれど金え拾両ばかり貸してくれ」

ふみ「何を……判然はつきり仰しやい」

徳「金を十両拝借致し度たいという訳だ」

ふみ「私の処にお金を借りに来られる訳じやア有りますまい」

徳「訳が有りア謝つて来やしねえ、訳が少し無いように成つて来たから止むを得ず只誠に

重々恐れ入つて、拝借を願うというようなマア訳だね」

ふみ「はアお前さんは私とは縁が切れて居ますよ、最う此方こつちへ私の籍を送つてしまえば、

奥州屋の者でございますから、兄きょうだい妹いでもお前さんに私がお金を送る訳は有りませんが、

今までに二十四度お貸し申したよ」

徳「心得て居ります、再度拝借致しました、併し現在の兄が倒れんとするを救わんというのは何うも道に違つて居る、そりやア縁は切れて居ろうが、血筋は切れん、その何うも兄弟の間柄でもつて、他に兄弟の有る訳じやア無え……重々悪い此の通り（平伏）此の通り恐れ入つて居る」

ふみ「何うぞ、お前さんも峯壽院様の御用達では無いか……お前さんは立派な天下の御家人では無いか、お父さんが亡くなると蔵宿は借つくし、拝領物まで残らず売つてしまつて、お母さんもそれを御心配なすつて、あの通りお逝去になりました、私より他に兄妹は無いと仰しやいましたけれど、大切な兄妹と思つて下さるかは知らないが、其の同胞をお前さんは騙して横浜に連れてつて外国人のらしやめに仕ようとした事をお忘れなすつたか、私が二十一の時だよ」

徳「まことに何うも重々相済まん」

ふみ「貴方は外国人は汚らわしい、日本は日の本だ、神の国だ、外国の人などを入れるなという日光様の教えもあるものを、背いてこんな事をしたからと、自分の憎者を余所にして、毎もあんな事ばかり云いながら、その汚れた外国人のところへ一人の妹をらしや

めんにするとつて、私を横浜に置去りにして、五十両の手金を持ってお逃げなすつた事を
お忘れなすつたかよ」

徳「いさゝか覚えて居りますな……重々相済まん、何うも仕方が無い、借財で仕方が無
えよ、借財でなア」

ふみ「私はお前に置去りにされて、知らない横浜の富田屋さんの家に泣暮して居ましたよ、
処へ富貴楼のお内儀さんが一寸富田屋さんへ用が有つてお出でなすつて、何ういう訳
だと申しますから、是々だつて話をする、あゝ、いう気性のおくらさんだから、それはお
気の毒だと今の旦那に話をして、私の身体を五十円で買われたようなもの、此所に来て居
るといつて、縁切りで来たのだよ、お前さん其の他にも家の旦那はあゝ、いう気性だから、
お前さんに別に又三十両お上げなすつた、もう是切り参りませんと云つても度々来る、
それは内証で私も二両や三両の事なら何うにかして上げたが、何度来ても旦那は会いはし
ない、お前さんも旦那の顔は知るまいけれども、兄さんが借りに来た様子だ、沢山の事で
も有るまいから、時々は些と宛小遣を持たして遣るが宜いとお前さんが這入つて来ると表
から外して出る、貸して遣れと云わんばかりに親切にしておくんなさる旦那の前に対して
は、私はお貸し申す訳には行きません、此の盆前に来てお前さん幾許持つて往つたえ、二

十円持つて往つたろう……其の時もう来ないと云つたでは無いか、その口の下から直借すぐりに来るとは実に私は呆れてしまった……貸されませんよ」

徳「まことに濟まん、貸されなきやア致し方がない、無いけれども何うも其の日に逐おわれて飯が食えんという事に成つたから、まことに何うも困る……何うあつても貸されんか」
ふみ「借りに来られた義理じやア有りませんよ」

徳「義理も道も心得ては居いるけれども、何うも一向仕方が無い」

ふみ「貸せたつてお前さんには返す方角はなし、お金を遣れば遣る程お酒を飲んで、只怠けてしまふだけの事で、お前さんにお金を上げると態わざと酒を飲ましてよいよいにする様なものだから上げませんよ」

徳「よい……最う是切り来ねえッぷ、何うぞ、恐入いもうとつた妹、妹と云つては縁が切れてるから奥州屋新助殿どんのお内儀さんに対して大西徳藏斯かくの如くだ（両手を突き頭さげを下る）矢張是も親の罰ばちだ、親の罰だから誠に何うも困る、うむ最う己は縁が切れたから己に思うと思つてもいけない、親、親にすると思つて……」

ふみ「なにお前さんは親の家うちを潰つぶしてしまつた人だわ」

徳「後生だから」

福「大變大變お内儀さん大變でございます」

ふみ「何だね、仰山な」

福「旦那が腹ア切ったツてえ知らせが……妻恋坂下で旦那が腹ア切つて居るつて、気が狂つたんでしうか」

ふみ「旦那が妻恋坂下で腹、まア誰か往つて見たのか」

これを聞くと徳藏は、

徳「はてな妻恋坂下と云えば昨夜乗せた客だが、あれが奥州屋新助では無いか」

と気が附いたから少し酒の酔が醒めた。

徳「直ぐに帰るから、些と無くてはいけないから、五両でも三両でも……係り合の事が有つて車を置いて来た」

ふみ「何だよ私の家は取込んでいるよ困るね、是でも持つて往つておくれ」

と有合わした小遣を遣り、子供を抱いたり負つたり致して、番頭立合で往つて見ると、なさけなき死様だ、常に落著きまして中々切腹する様な人では無いが、何う云う訳か頓と分らない。拠なく此の事を訴えますと、検屍事済になつて死骸を引取りまして、下谷の広徳寺に野辺送りをする事に成りましたが、誰が殺したか頓と知れませんが居りまし

たが、是が自然に知れて来ると云うは、悪い事は出来んものです。一寸一息致しまして。

五

えゝお話二つに分れてまして、数寄屋町の有松屋のお話でございます。芸者屋の商売などと云うものは、外見はずうツと派手に飾つて、交際も十分に致し、何処に会が有つても芝居の見物でも、斯ういう店開きが有れば其の様にびらを貼るといふ様な事でございまして、中々物入の続く商売。殊に暮などは抱子を致して居れば、新しく出の紋附を染めるとか、長襦袢を拵えてやるの、小間物から下駄穿物に至るまで支度を致すといふので、大した金の入るものでございます。婆は少し借財の有る処で身請といふから、先ず是で宜いと喜んだ甲斐もなく、打つて違つて奥州屋新助は腹を切つて死んだと云うので、ぱったり目的が外れました。是から歳暮に成りますると少し不都合で愚痴ばかり云っている処へ、

幫間の三八、

三「お母さん今日は」

婆「おやお這入んなさいまし」

三「押詰りまして」

婆「何うも月^{げつ}迫^{ばく}に成りました、誠に何うも寒い事ねえ、暮の二十五日だからねえ、時々^{としわすれ}忘^{わす}年^{ねん}のお座敷なぞが有るかえ」

三「有るにア有るけれども、昔と違^{ちが}つて突然^{だしぬけ}に目的^{あて}が外れたりして極りが無いから困りますのさ」

婆「けれどもお前なぞは氣樂で宜^いじやアないか」

三「氣樂でも何でも無いのサ、何うも只^{ただ}た一人者でも雇^{やとい}婆^ばアさんの給金も払うなが無^ねえんで、勘定というものは何処にも有るもんでですが、暮はいけませんねえ、押^お掛^{かけ}のお座敷に往つても御祝儀は下さいませんから誠に困りますよ、お歳^{せい}暮^ぼの時なんぞは御祝儀処か、おやお出でかえ誠に取込んで居るからと云うんで、無しさ、幫^{たい}間^{こもち}なんどは暮はいけませんア、来^{くる}春^{はる}を待つのですが、お母さんなんぞは土用が来ても歳暮が来ても福々しいね」

婆「何うして大^{おお}違^{ちが}い、それに彼の奥州屋の旦那がね、ソレあの時お前も落合つて身請^{あさ}つてえから少し苦しい処だから丁度^{たいど}好^い塩梅だと極りがついて、明後^{あさ}日は身請^{あさ}というから當^{あて}にして、私もその支度もし、別に抱えも仕たいと思うからそれに當^{あて}箝^はめ、借金も返す約

束に成つてゐる処が、ぽかりと外れてしまつた実に困つたのサ、だがね何うしてあの方があんな死しによう様を為すつたろう」

三「解らないよ、泥ぬかるみ濘へ踏込んで、どつこい悪い処へ来たと後あとへ身体を引いて、一かた方の足は汚さねえと云う方だが」

婆「それが何うも腹を切るなんてえのは」

三「なに矢張り洋物屋の旦那様でも、元が士族さん様の果はてで、何かで行詰つた事が有つて、

義理堅い方だから義が立たたないとか何とか云う所からプイと遣つたか、それとも人にねえお前さん好い年をして芸者の身請を致して、女房子の有る身分からだで了りよう簡方けんがたが違おうとか何

とか野暮な小言を云つた奴が有つて、色に溺れるのじゃアない、美代吉の身請を致して、

好い亭主よを持たせるのだと言つても聞かないで、悪い喧嘩でもしてそう思われたが口惜し

いとか何かでプイと腹ア切る氣になつたのかも知れない、それとも腹ア切るのは容易の事

じゃア無ねえ、善々よくよく思切おもいきつたのであらう、それとも無理な才覚をなすつて美土代町のお

宅でも悪借金わるじやっきん……でもありやアしないかと思われますねえ」

婆「是が為に外れて私わちきは誠に困つて居るが、美代吉は身請が外れて嬉しいと云うような顔をしてゐるのが腹が立ちますわね、此の頃美代吉は外れてから元氣が出たよ、あゝ、いう分

らない阿魔つちよだから実に私は途方にくれるんだよ、この暮は本当に困りますよ」

と噂をして居るところへ藤川庄三郎門口へ立ちました。装なりは南部の藍あいまん万の小袖に、黄八丈の下着に茶献上の帯に黒羽二重の羽織で、至極まじめのこしらえでございまして、障子戸の外から、

庄「御免……美代ちゃん宅うちかえ」

婆「はいお兼かねや、誰か来たから鳥渡ちよつと往つて見な…表へ誰方どなたがお出でなすつたよ」

兼「はい」

女中が駈け出して障子をがらりと開けると庄三郎。

兼「おや入つしやい」

庄「まことに御無沙汰（挨拶をしながら）美代ちゃんは」

兼「今何なんでございます、一寸お約束ちよつとで出ました」

庄「お母さんは」

兼「お母さんは居りますからまアお上り遊ばせ」

庄「はい御免なさい」

婆「おい一寸兼や、何だよ、気の利かない女こだよ、藤川さんだよ、無闇に上げちゃアいけ

ねえなア……この節は何うもいけない、余程よつほどいけねえ、様子の悪い、それを無闇に上げてさ、居ないと云えば宜いいに何だね……最上つてお出でなすつたアね……さア（急に笑い顔）此方こつちへお出でなさい」

庄「お母つかあまことに御無沙汰、一寸来なくちやアならんのだけれども、駿府の方から親戚の者が出て来て居るもんだに依よつてな何や彼かやと取紛とりまぎれて、何うか僕も親族の者が、遊んで居てもいけないからと云うので、今度商法をね……当節は兎角商法流行ばやりで、遠州の方から葉茶はぢやを送ってくれると云うので、蠣殻かきがら町ちように空家あきやが有つたもんだから、それを借りて漸ようやく葉茶屋を開店することに極りがやつとついたんで、お馴染には成つてゐるしするから、悪い耳と違つて善よい事をお聞きかせ申したいと思つてね……参つたが、何時もお変りございませんで、次第に月迫げつぱくに」

婆「まことに押詰りましてさぞお忙がしゆう……おゝそれは結構でございますねえ、大分だいぶ皆さんが御商法をなさいます、仰しやるお茶屋だの料理屋しるこ屋色々な事をして、素人で真似をしたのは何うも長持のないもんです、慣れない事てえものはいけませんよ、士族さん方の御商法は何うも外れ易いものでございますから、貴方も一生懸命にねえ……まア御勉強なすつてお遣ななさりア宜しゆうございましょう、生あいにく憎美代吉は居りません

で」

三八「これは何うも暫く………先^{せん}達^{だつ}ては失敬をいたしました、今という只今貴方のお噂
たら／＼へ／＼」

庄「いや私こそ御無沙汰致しました、お母さん、少し御相談が有つて来たんだがねえ、些^{ちつ}
と申し難^{にく}い訳だから、一寸どんな小部屋でも有りア」

婆「御存^とじの通^{とおり}の私^{わちき}のここは小部屋も何も有りませんが、何の御用でございますか、何う
か此処で仰つしやつてね／＼、何うも下さいませんと困りますねえ」

庄「実はお前も知つてゐる通り、知つて知らんふりでお出でだろうけれども、実は僕ア道楽
てえものは今迄仕た事はねえが、下谷へ来てから誘われて一度遊んだのが病^{やみつ}付で、其の
後はお前さん^{とこ}処の美代吉さんと私は隠れて遊んだ事もある、お前がそれが為に腹を立てて
私を寄せ付けんという事も知っています」

婆「そう改まつて仰しやつちやア困りますねえ、何も寄付けねえ訳は有りませんけれども、
お前さんも亦、私は遊びましたよ、はい御存^{とこ}じでござりましょうが、お前さん所の美代吉
と隠れて遊んだと仰しやられちゃ困ります、実はお前さんと美代吉が遊びたいばかりで、
それまでは堅い妓^こでございましたけれども、お前さんに誘い出されて向島^{うわて}くんだりへ往つ

てさ、二晩や三晩家を明けた事も有ります、それも宜いけど、あんな人の好い奴だからお前さんと遊ぶにも、お前さんだつて有り余る身代じやアなし、身上りをしたり、聞けば他で以て高利を借りて、それも是れもまア稼人のこつたから私は何にも云いせんけれども、考えて御覧なさい、私は玉をいくら取り損つたか知れやしない、それもまア私は何とも云いはしないが、お前さんにそう改まつて御存じだろうと仰しやられちやア、私も困りますよ、はい随分困ります、……知らない振で居ましたが、何うぞ是からは遊んで下さらないように願いたいねえ」

庄「だからお前に苦勞させて済みませんから、何うか多分の事じやア出来ないけれども、母にも打明けて話し、親戚の者にも話したが、美代吉はお前の娘という訳でもなし、云わば抱えて流れ込んで居るという事を知つて居るが、此の藤川に身請をさせて貰いたいんだ多分の金円を出せと云つては出来ませんが、何うか身請の処を御承諾を願いたい」

婆「へえ、大層お立派な事を仰しやいますね、それは藤川さんお前さんも惚れている女ですもの、身請をしてお前さんの家へ女房にして置きたかろうさ、お前さんも矢張旗下の若様、私も母でございますから、成ろうものなら美代吉も惚れているお前さんの処へ上げたいがね、昔は安かつたもの、五十両も有れば出来ました、立派な花魁の身請をして

も三百両で出来たがね、それが今は法外の話、五十や六十の目腐れ金では出来ません、相場がねえ何うも誠に申すもお気の毒だが、大した事でございまして、何うしても三四百両のお金が必要はお前さん達の何うでも出来る話ではなし、身請をしておくんなさいとも云われません、お前さんも美代吉も惚合つてる中だから出来る方なら私の方から願おうが、それがそれ何うもはいと云う事も出来ないような訳、何しろ事柄が大きいから」

庄「じゃア四百円お金を出せば身請が出来るの」

婆「左様さ四百円有れば出来ますねえ」

庄「屹度きつとそれならば身請をさせて下さるか」

婆「そう出ればまア……夢見ていな……恵比寿講の売買うりかいの様なお話でございますからね」

庄「実はね、母に打明けて話したら、芸妓げいしやの身請は何のくらのものだろうというから、先ず三百両ぐらい掛ろうと云つたら実は母も驚いて、昔は五十両もあれば出来たものを大分高いと云つたが、実は斯々これくだと云つたら、まア三百円の金も無いけれども、そうなりや身請をしたら宜かろうと、親族から漸くに少し金策が出来て、実は此処に四百円才覚をして来たんだが、此の金で身請をさせて下されば、今日直ぐに書附かきつけを取替とりかわして美代吉だけを連れて往ゆきたいが御得心ごとくしんかえ」

婆「あれ、あなた本当のお金……」

庄「本当のお金だつて（苦にが笑わらい）」

婆「まア何うも恐れ入りますねえ、まア何うも藤川さん、本当にあなたまア何うも誠に私やアホ、、、（笑）一寸お音信たよりをしたいと思つて居りましたけれども、斯ういう忙がい中で、まア美代吉にも私やアいつでもそう云うの、御最眞になつた方へはお前書けない手でも文ふみの一本も上げなつてねえ、それが芸者の当あたり然まえだと云つて、まア子供見た様な者ですから、遂ついまア存じながら御無沙汰になつて本当にね、三八はんそう身請に成ればホ、、、旧もとが旧もとでおいでなさるからねえ、一寸お話しにさえなりやア御親類からお金が四百でも五百でも出来て………そうなればねえ」

三「旦那さんの前で急に機嫌が直つたりしちやア私まで一寸面顔かおあか赤になるが、まアお芽出めで度とうござ、美代ちゃんがお喜びは何のくらいでげしうか、実は何うも思う男とは添そわせたいので」

婆「本当に私わたしも嬉しいから美代吉もさぞ喜ぶでございましょう……、私わちきは斯うなるとね吾が子のような心持がして……お兼やお茶を入れな、ホ、、、そうして宜いいお菓子を取つて来な」

と婆は直に機嫌が変りました。是から庄三郎は忽ちたちま四百円で身請をして連れて帰る。強こ飯わめしを云附けて遣り、箱屋や何かにも目立たんように仕着しきせは出しませんけれども、相応の祝儀を遣りまして、美代吉を引取つてまいる。これから母も得心だから蠣殻町へ店を借受けまして、駿府から葉茶を引いて、慣れん事だが又慣れた者が附きまして、活計も何うやら斯うやら容易に立ちまするようの事に成つた。親族も善よい縁類も有るから少し足りないからと云えば是れへ往つて才覚も出来る、女房も持つてゐるから融通も附きますと云うので、仲なか好く其の年も経ちまして、翌年九月までと云うものは極愉快ごくにして暮していたが、唯心たゞに絶えぬのは新助の事です。兄新助のお金で私わしは斯うやって身請をして、思う女と夫婦に成つたが、美代吉は知らずに居る事の氣の毒さよ。ちようど四日が命日だったので、毎月四日の日には自分で香花かうはなを手向け、仏壇に向つて位牌は無いけれども、心うちの中で回向えこうして居る。九月四日は最もう一周忌の命日でございますゆえ、

庄「おいお美代」

美「はい」

庄「今日はお茶の御飯ごぜんを炊かないか」

美「お茶の御飯は私きらいや嫌きらい、赤のお飯まんまをお炊きなさいな」

庄「まア今日はお前めえを鼻屑あすこにしてくれた美土代町の奥州屋さんの丁度一周忌の命日で、此の間美土代町を通つたら彼処うちの家は變つてしまつて今は乾物屋になつた、此処とうぶつやに洋物屋が有つたのだと思うと、余あんまり善いい心持のものでも無い、おいらも一度でも遇あつたのだから、志だから水菓子でも取つて仏壇へお茶でも」

美「きまりだよ、お前さんは奥州屋さんのことをおかしく云うけれども、私わちきが何も奥州屋さんと交情わけでも有りはしまいし、あの旦那だつて私を色恋で何う斯うという訳ではなし、何かお父さんとつと歌のことで仲好くして、世話にも成つた事があるから、身請をして遣ろうと云つた時に、お婆さんが彼あんな事を云つたもんだから、お前さんも訝おかしく思いなさるんだが、私わたしや本当に奥州屋さんばかりは何にもいやらしいことは無いの」

庄「いやさ、いやらしい事が有る無しじゃアない、たとえ何もなくても一度でも呼ばれたお客が死んだと云えば、その命日には線香の一本ぐらい上げるのは、たとえ芸者でも其処そこが人情じゃアないか、今日は兩人ふたりで彼あの人のお寺詣りをして遣ろうじゃアないか、広徳こうとく寺じへ往つて」

美「広徳寺というのは彼の人のお寺、あんた能く御存よじで、何うして知つて居るの」
庄「なゝなに此の間他わきで聞いたのだ、一寸志だから」

美「厭だアね、人：たつた五六度呼ばれたお客の死んだ度にお寺詣りするくらいなら、毎日お墓詣りをして居なければなりやアしない詰らないじやアないか、お止しなさいな」
 庄「お前のお母さんのお墓参りをして、帰りに上野の彰義隊のお墓参りをして、それから奥州屋さんのお墓参りに、遊びながら彼方の方へぶら／＼と一緒に往きな、菊時分だから人が出るよ」

美「まだ大變菊には早いじやアないか」

庄「今日は紋付だよ」

美「いやだよ一寸何だねえ」

庄「そうでないて事よ、往きなよ、お前もお母様のお墓参りに往くのなら、紋付の着物であらたまつて、香花を手向るのが当_{あたりまえ}前_{めえ}じやねえか」

と無理に紋付にさせるのも庄三郎心有つての事です。此方のお美代はそんな事は知りませんが、亭主の云う事故仕方なく紋付を着て。此の節は滅多に着ることが有りません、久しぶりで紋付を着て上等帯を締め、大きな丸鬘になでつけまして、華美な若粧、何うしても葉茶屋のお内儀さんにいたしては少し華美な拵え、それに垢抜けて居るから一寸表へ出ても目立ちます。これよりぶら／＼遊歩を致して母の墓参りをして、上野を抜けて広

ろこうじ
小路へ参り、万円山^{まんえんざん}広徳寺に来て奥州屋新助のお墓へ香花を手向けて、お寺には縁類の者であると云つて附^{つけとぎ}届を致し、出て来ますと、ぽつうりくと秋の空の変り易く降り出して来ました。

庄「困つたな降つて来たよ、何処かへ往つてお飯^{まんま}でも食べて雨を止めようじやア無いか」
美「出る時は降るだろうと思つたから、蝙蝠傘^{こうもりがさ}だけは持つて来たが、沢山^{たん}の降りも有りますまいか」

と夫婦で車坂の四ツ辻まで来ますと、後^{あと}から汚ない車^{くるま}夫^やが、
車夫「えゝ若^もし旦那え、帰り車でございますから、お安くお幾許^{いくら}でも宜いんですが……へい何方^{どちら}で、日本橋の方へお帰りですか、日本橋なれば、私^{わたし}も彼方^{あつち}の方へ帰るんですが何方^{どちら}なんです、四ツ谷の方に、へえ私^{わたし}も牛込の方へ帰りですが」

何処へ帰り車だか分らない。

庄「まあ宜い、車が汚いから、あゝ大変に降つて来た」

美「私は久^{わちぎ}振^{ひさし}ですから長者町^{ちやうじやまち}の福寿庵^{ふくじゅあん}へ往つておらいさんに逢つて、義理をして往^ゆきたいんですが、帰りに他家^{ほか}へ寄つてお飯^{まんま}を食べるなら、福寿庵^{ふくじゅあん}へ往^いつて遣つておくんなさいよ」

庄「あゝお前の世話になった以前の御用達の福田か」

美「あの旦那は大層立派に暮しをなさったそうだが、今では御亭主が料理屋を」

庄「おいゝ若衆さん、あの長者町の福寿庵という汁粉屋な、彼処でお飯を食べて、それから蠅殻町へ帰るんだが、少しの間待つてるようなら御飯ぐらい食わしてやるが」

車夫「えゝ何うも有難うございます、まるつきり今日は溢れちまって、空ア挽いて帰るかと思つていた処で、何うか幾許待つても宜しゆうございます、閑でげすから、お合乗でへい、少し（空をながめる）なんでげすが大した降も有りますまいから、幌は掛けますまい」

フラン毛布を前に押附けて、これから福寿庵の前に車を下します。車から出て板橋を渡つて這入りますと、奥に庭が有りまして、あの庭は余程手広で有りまして、泉水がございます。その向うに離れ座敷が所々に有りまして、客をしますので、馴染のことでございますから。

妻「まアゝ美代ちゃん誠にまア久しく、いつもお噂ばかりして居たの、好く………おやそうお寺参り………私もね一寸お尋ね申したいと思つても、御存じの通り一人人体で、皆な私にばかり押附けてあるもんだから、私は何処にも出ることが出来ないの………じゃ

アね奥の六畳の方へ（下女の方をふり向きて）もうお帰りになったろう……汚れて居るか……あゝ、じゃ縁側附の方が宜かろう、あの八畳の方へ御案内申しな」

婢「じゃア此方へ入らつしやいまし」

と婢の案内でもつて八畳の間に通ります。

庄「何が有る」

と云うと相変らず、

婢「小田巻蒸に玉子焼、お刺身が出来て塩焼が有ります」

庄「たんとは飲めない口だが一本爛けてくれ」

と云う中に懐かしいから女房が取巻きに出て来た。

妻「まことにまア御無沙汰……好くねえ」

美代「私も誠に御無沙汰いたしました」

妻「好いことね、此の間も稻ちゃんだの小しめさんも来てね、噂たら／＼さ、心掛けの善い人というものは、まア誠に妙なものだ、美代ちゃんのくらい運のいゝ人は無い、世にはとんだ者に騙されて、いくらも苛いめに遭うものが多いのに、自分の思う所に請出され行つて御新造に成ると云う、そんな結構な事は何うも誠にねえ、おや是やア御免なさい

ましよ、始めておほ、私わたしアまア浮うかりとして、只お懐かしいので美代ちゃんの事ばかり……藤川様とか……誠にね、予かねてお噂には伺つて居りましたが……そうでございたか、遂ついね、心安立こころやすだてにもうね、まア美代ちゃんくと言い慣なけて居るもんですから御新造様の事をホ、私わたしはがらくして居りまして、そうでございましたか……何うもお二人様ともお雛様を一对列なべたようで……御緩ごゆつくりなすつて、今旦那が帰つて来ますと自分で手料理が出来ますが、生憎居あいにくないから、まア緩くり遊んで居て下さいな、生憎降つて来ましたが大した降りも有りますまいけれども、まア、それに此の間ね新藏しんぞうさんがお出でなすつたが、その折あなたがお店に坐つて居たつて、元が元だから商人あきんどの店にでも官員でも何処へ出しても本当に上品のお内儀さんだつてお噂致して居りました、大層お似合いなすつたこと、この丸鬘やつぱりめくらは矢張彼方しやうの方にも芸者衆しやうや何かが居ますから、髪結かみいさんも上手だと見えて大層宜いい恰好かつこうに出来ました事、いゝ事ね、何て……まだ島田が惜わしいようですね、は、却かえつて凜々りんしくてね、丸鬘の方が宜しゅうございますよ、私わたしはいえ最もう（盃を受け）有難う、たんとは頂けません……これから私が参つて茶碗蒸を拵たえますから」

庄「誠に御馳走様で」

これから頻しきりにお酒を飲んで車夫くるまやの方にも酒が一本附きましたる事にて、車夫も好い機嫌になつて、

車夫「へい旦那様有難う」

庄「あゝお前めえも草鞋わらじで此処へかけるがいゝ、其方そつちへ踏込ふみこまんように」

車夫「えゝ御新造様有難う、何うも閑で仕様のねえ処とこへ言値いいねで乗つておくんなすつて、おまけにお酒やなんかア、まアおいしい物で御飯ごぜんを頂くなんてえ、こんな間の好い事はねえ、ゲーツ……………有難うございます……………御新造様アお何歳いくつでございすか、お綺麗でおいでなさるなア何うも……………御紋付がすっかりお似合いなさいますな……………御新造様の御紋はお珍しい、こりやア何だろ、へえ宜よい御紋ですな、是は三蓋松さんがいまつてえので、余り付あんまけません、俳優やくしやの尾張屋の紋でげすなア」

美代「フゝゝ（笑）野暮な紋だから屋敷や何かでなけりやア附けない紋で」

車夫「旦那さんの御紋は……………花菱だけれども、実みの花菱ではも余り人あんまが付けねえ御紋で……………えゝえ妙な事があるもんだ、斯う紋がぴたり揃つてるのは不思議だなア……………えゝ旦那え、これは（煙草入を懷より出し）実は洋服持の煙草入ですが、黒棧くろざんで一寸袂ちよいともと持もちの間に此の鉈豆なたまめの煙管きせるが這入つて、泥だらけになつて居るのを拾つたんで、掃除を

して私が大切に持つて居りますが、実は私どもわたくしの持つ物ではございませんから、質屋の番頭だつて蔑けなしやがツて、私どもわたしにも有つちやア仕方がねえ、煙管が何うも実に旦那不思議なんで、私にやア分らねえが、銀だつて云いやすが、この紋がねえ、三蓋松に実の花菱が、そつくり象嵌ぞうがんで出て居るつてんだ、こいつア妙じやアございせんか、これが突つ込んだ儘なりで有るんですがすが、悉そつくりお両方ふたかたの紋が比翼に付いて居るてえのは何うも妙で、一寸とこれは何うです旦那……」

手に取り上げて庄三郎が恟びつくりいたした。まだ是は美代吉には話をせずうに自分の心の中うちの惚のろけ氣に、美代吉の紋と吾が紋を比翼に附けて誂あつちえた鉋豆の煙管、去年の九月四日の夜よ、妻恋坂の下で、これは慌てゝ取り落したものだこたが、何うして此の車夫くるまやが持つて居るかときつくり胸に応こたえましたまえが、側にお美代が居るから、

庄「お美代お前まえと己の紋が有る、似た紋も有るが不思議じやアねえか、不思議じやアねえかよ、えゝ悉そつくり二人の紋が付いてるとは是りやア不思議じやアねえか」

美「誰の」

庄「誰のだか分らねえ……車夫くるまやさんお前まえがそれを持つとうというのか」

車夫「わつちが持つて居たつて仕様がねえんですがすが、あなた紋が悉そつくり附くつ着いて居やす

が、お廉やすく何うか廉くお買いなすつて下さりア有難てえんですが、わっちが質屋なんぞに持つて往ゆきますと手数が掛つていけませんや、そつくり貴方ごじよもんの御定紋だから持つて入らつしやりやア私わっちが是を拾つたとも云いやせんが」

庄「買つても宜いいけれども幾許いくちで売ろうてえのだ」

車「こんな物で、幾許でも宜うがす、まア人に聞いた処ねうちの価値は五十両が物は有るつてえので」

庄「なにが、冗談いつちやアいけねえ、無垢むくの煙管の誂むえで、何んなにしたつて、何う目方が附いたつて五十両なら出来るじやアねえか、こればかりの鉋豆の煙管を五十円遣つて買う奴が」

車「たゞの煙管とは違うんで、紋がちやアんと御新造様の紋とあなたの紋と比翼に付いて居るところがこいつの価値ねうちだ、はゝア誂よんどこれえりやア出来るが、わっちが持つて居るといけねえものだ、持つて居れば抛よんどころなく訴えなければならねえ、去年の九月四日の晩、妻恋坂下の建部……………サだからつて」

庄「む……………なに」

車「拾とつた処とこを云わなければならぬが、御迷惑が掛つちやア済まねえから、売りてえの

を我慢して、何うか御当人にお渡し申してえと思つて、今まで腹掛の隠に突込んでいた所が、何時までもねエ其の人が知れねえんだ、まア持ち腐れじゃア詰らねえから、旦那御紋所がちゃアんと合つて……五十円」

庄「馬鹿ア云つちやアいけねえ」

美代「お止しなさいな、お止しよ……車夫さん大概におしよ、五十円なんて誰が人馬鹿々々しいじゃアないか、金鈍子か何かの丸帯が買えるわ」

車「帯は買えるんですが、これは煙管の紋が……そりア一寸宜いので」

美「宜いのでたつて、そんな高い煙管や何か買える訳のもんじゃアない、だから、あなたお止しなさいよ、（車屋に向い）まア宜いよ」

車「無理に私アお上げ申すという訳じゃございませんで、私がこれまで持つて居たのは悪いから、それだけ叱られて仕舞いさいすりア……斯ういう訳でがす、私ア酷い目に逢いました、建部の側で私ア溝の中に転がり落ちて何うも物騒で、雨の降る中びしゃアリという訳で、何うも……なアに人てえ者は見掛けに依らねえもんで、まア私は訴えますから」
 庄「まアく宜い、若衆さん、買う買わねえは兎も角も一杯此処で飲みねえ、お前も何だろ、腹からの車挽じゃアあるまい家は何処だい」

車「家は無えんで、ふてつくされ猪武者、取っただけは飲んでしまっても仲間の交際と云うものは妙なもので、何うか斯うか腹ア空れば飯い食つてまア……無理にという訳じゃアないんでですが、お互に時節柄斯ういう訳になつて車ア挽くんで」

美「酔つて居るからお止しなさいよ、御飯を食へさせて帰しましょう、酔つて車ア挽けやしない、お内儀さんを一寸呼んで、別に車を逃えましょう」

庄「お前往つて呼んで来な、手を叩くと旦那じみて極りが悪いから、一寸往つてお出で、

(美代吉の跡を見送り) 若衆」

車「えい」

庄「煙管を己が買おうが、今は持合せが無えんだ、己と一緒に……家内が居るから家内の前で高い煙管を何で買うかと思われても困る、金を他に借りる処が有るから、己が一人で前前の車へ乗るから、往つてくれ、ば金を借りて渡すから、此の煙管と引替に売つて下さい」

車「宜しゅうございます……御新造さんは知らねえのか……いや承知いたしました、万事心得ました」

庄「そんならば」

とて福寿庵の女房を呼び、何やら密々耳こすりを致し、お美代を蠣殻町まで一人で帰す事に相成り、一人乗の車を別に雇い、お美代を先へ帰して置いて、自分は大西徳藏の車に乗って金策に谷中の蛭沢にまいるというお話でございますが、一息つきまして申し上げます。

六

へい藤川庄三郎、彼の大西徳藏という車夫に供をさせて、人力でどつとと降る中を谷中の笠森稻荷の手前の横町を曲つて、上にも笠森稻荷というが有りますが、下の方が何か瘡毒の願が利くとか申して女郎衆や何か宜くお詣りにまいって、泥で拵えたる団子上げます。あの横町を真直に往き右へ登ると七面坂、左が蛭沢、宗林寺という法華寺が有ります。その狭い横町をずうツと抜けると田圃に出て、向うがずうツと駒込の方の山手に続き微かに未だ藪蕎麦の灯火が残っている。田圃道で車の輪が箔つて中々挽けません。

徳「旦那いけませんな、こんな道じゃア何うも方が立たねえ、旦那何処へお出でなさるん

で」

庄「まア最う少し遣つてくれ」

徳「もう少したつて往いけませんか、何うもこの道じゃア」

庄「じやア歩おほこう、まア此処に下おろしておくれ、何うしたつて金策に往くんだから、お願いだから提ちようちん灯あかりを持つて、車は此処へ置いてお前一緒に往つておくれでないか」

徳「へい、それは何処へでも往きやすがな、私わっちにやア……唯でさい歩き難にくい道だに、お前さん何処まで往くんか知らねえが、困りますな何うも」

庄「だが好いい塩梅に少し小降こふりになつた」

徳「えい大きに小降に成つたが、何うも降りやすね何うも……旦那去年の九月四日の晩も此こんな様に降りましたな」

庄「うむ左様そうかなア、去年も降つたのだから覚えねえ」

徳「へん、降つたか覚えねえ、旨く云やアがる、妻恋坂下のね建部裏まで通りの客を挽いて往つた時に、ぴしゃアりと提灯を切られた時に私わっち胆きもを潰つぶして、あの建部裏の溝どぶにおつこツちまつた、好よい塩梅に少し摺剥すりむいたばかりでたと負傷けがはしないが、泥ぼつけえ、寒くて仕方がねえから、夜明よあかしに這入つて酒え飲んで、転がっちゃつた、処がその客は私ア

縁が切れては居るが、かたづいてゐる妹の亭主だ、それとは知らねえでおまはんから何うも………後は妹一人で仕様が無え、今では横浜へ往つて居りやすが、何うも身上を大きくするくらいの奴は無理な算段でもつて店を明けるような事が有ろうが、何うもへへへへ、借財がまア多く有つたもんだから店を明けてゐる訳にも往かねえで、今では子供を連れて横浜へ往つてますが旦那、冗談じゃア無え、あの時私ア拾つた煙草入だから五十円じゃア安いもんでしよう」

庄「ふむ、おまえは彼時に挽いてた若衆か」

徳「へへあの時に私ア……、彼奴を殺しておまはん金え奪つたんでげしよう、その金で彼の別嬪を身請をして、惚れた同志が夫婦になつて葉茶屋を出してゐるなんてえ、へへへ、羨しい話じゃア有りやせんか、此方ア未だぶらちやらして居るんですから直にまア野暮な事を云わねえでさ、面倒だア買つといておくんなせい、五十円では是をおまはんが買つて下さりやア私ア其の金を資本にして一商法、私が宜くなりや浜に居る妹も引取つて、又お前さんに恩返し仕られねえでもない、そうすりやおまはんの些たア罪も消えると云うもんだ」

庄「うゝ先刻の煙草入はそれじゃア手許に有るかえ」

徳「ふむ有るくそれでねえ」

庄「なアに私が落した煙草入と違っている、紋は実の花菱と云ったが、一寸出して見な」
車夫くるまやの出すのを取って、

庄「提灯を上げて見な」

徳「えゝ是ですが、よく御覧なせえ」

庄「はア此りやアなんだ違うよ、大變違うよ（懷中に入れる）」

徳「どゝゝ懷に突込んじやいけません、懷に突込んじやア」

庄「宜いよ、違つても違わんでも彼の時に挽いた若衆わかしと云やア何にも云わず五十円で買おうが、決して他言をしてくんなさんな」

徳「そりやア必ず云いません、今こそ車夫しやふが大西徳藏いさく、聊か徳川の臭い米を食つて親を泣かした人間だから、云わんと云つたら口が腐つても云いはしない」

庄「それで安意致した……人が来やしないか」

徳「いや田圃の中で此の大雨、来る人はございやせん」

庄「向うに見える灯火あかりは」

徳「ありやおまはん藪蕎麦だよ」

庄「おゝあれが藪蕎麦か……向うに見えるは」

と徳藏に向うへ眼を付けさせて、見ると懷から拔出した合口を把^とつて、力にまかせぶつうりと突いたからばかりと前にのめりました。この騒ぎを少しも知らないのはお美代です。婢^{おんな}は元数寄屋町の有松屋に奉公していたのを、お美代が旦那を持ってから自分の手許^{てもと}に呼んで、昔話をするのを樂^{たのし}みに致して居ります。

美「今歸つたよ」

婢「おやお歸んなさい」

美「お前後生だから折^{おり}が二つあるから、お皿を三つばかり持つて来て……くつついていけないから……それは栗の金^{きんとん}団だよ、お前は甘い物が嗜^すきだから是を上げるよ」

婢「これは私は最う何より旨いと思つて居りますよ、それとね姐^{ねえ}さんお座敷の時のねえ、あれは何でしたっけね、あの斯うしてそら斯うして丸くつて、それ付^{つけ}合せ^{あわ}のお肴でござい
ますよ」

美「おゝそうく、むつの子がお前は嗜きだったね、お前に持つて来たんだからお食^{あが}りよ」
婢「ほんとにねえ、あの有松屋の婆さんのように吝^{しわ}い人は有りませんわ、何でも食^{たべ}ろという事が有りません、だからねお芋や何か買つても、あなたも知つて入らつしやるけれども、

ほんとに何ですのほゝゝあなたなんぞは稼かせぎに人ですからだが、私なんかには焼芋を買つても、一番冷たくなつたお尻の方で無くてはいけませんの、あれでお金を溜めたつてね、本当にまア悪く云つちやア済まないが、本当にいまだに覚えて居りますよ」

美「そうくゝあの時分にお前お砂糖を盗んで甜なめていた処を見附かつた事があつたね」

婢「そうくゝ、あゝ知れませんよ、時々さじで出して甜めました事がありましてね、一遍知れたよ、私が口の端はたに附くつついていて、少しの間板の間に坐らせられた事が有りましたよ……

……大層結構な、これは福寿庵の、大層お上手ですこと」

美「あの旦那が元御用達で、旨い物は食べつけて居て、それでお内儀さんが元芸者で苦勞して、方々の料理茶屋の物を食べて居るから、何うしてもなんだね調こしらえ理は上手だよ」

婢「そうして旦那様は何処どこへ……」

美「あゝお金を何うとかと云つて往つたよ」

婢「大層遅いじや有りませんか」

美「なアに今に帰るだろう、旦那が帰つたら一口召上るかも知れないからね、少しお肴を支度して置いておくれ」

いくら待つても帰りませんので案じていると、ちーんくという二時の時計。

庄「大きに御苦労く、若衆わかし（車代を払う）……………帰ったよ」

婢「はい旦那様がお帰りですよ」

美「あれさ起きなくつても宜いいわ、寝ておいでよ……………只今明けますから……………おや車で、若衆わかしさん大きに御苦労」

車「へい」

美「お茶でも飲んでお出でなさいな、そう大きに御苦労様……………あなた余あんまり遅いからお泊りに成ったのだから、私も今寝ようと思った処、あゝ宜よい塩梅ひときりに一時降つてから小降りに成りましたねえ、それにね蝙蝠傘は漏りはしませんか」

庄「なに車に乗ったから傘は要らなかつた。」

美「そう、甚ひどいのは何処まで往つておいでなすつたの」

庄「王子の茶園に往つて送り込こみを頼んで来た、二三日中ちうちに送り込むだろうが、来なければ又往つて遣ろうが」

美「着物が大変泥だらけですな」

庄「えゝ着物か、着換えよう」

美「さアお着換えなさい、何うも是からまアほんとに泥が附いて、ま何うしたんだろう、

あら血が附いてますよ」

庄「な、なんだ、あアあのなんだ、こゝ駒込の富士前めえの方から帰って来たら、青物市場の処ところを通ると、犬が五六匹来やがって足へ絡からまつて投げられた、其の時噛かみ合つた血だらけの犬が来やがって、己に摺附けたもんだから」

美「あらま穢きたないじやアないか、些ちつと乾ほしましょう」

庄「あゝ其方そつちの二畳の部屋の方へ出して置いてくれ、穢きたならしいから……おい一杯酒を飲もう」

と是から酒を飲んでぐうツと寝てしまった。翌日あしたになつて車夫くるまやが持つて来た煙草入に煙管の事を聞いても、知らんと云い、彼れあやそうじやない、煙管も知らん、と云つてお美代にも隠し置いたから、誰たれあつて知る者は有りませんが、それから翌年に相成りますと、一月げつあたりは未だ寒氣も強く、ちようど雪がどつどと降り出して来ました。幫間たいこもち三八の腰障子の閉たつて有る台所に立ちましたのは、奥州屋の女房おふみ、三歳みつに成る子を負おぶいまして、七歳ななつに成るお豊とよという子に手を引かれて居ります。駒込こまごめ片町かたまちの安泊やすどまりに居りまして、切通きりとおしの坂を下りてようゝ此処まで来る中に二度転んだと云う俄盲にわかめくらでございます。柳川紬やながわつむぎの拾一枚あわせ、これも何うも柳川紬と云うと体裁が宜よいが、洗張あらいはり

をしたり縫^{ぬい}直^{なお}したりした黒^{くろ}縷^{じゆ}子の半襟^{はんえり}が掛けてあるが、化物屋敷^{みす}の簾^{すだ}のようになつて、王子の製紙場^{せいしば}へ遣つても宜しいという結びだらけの細帯、焼^{やけ}穴^{あな}だらけのあめとうの前掛^{まへかけ}が汚れ切つて居ります、豆腐屋の物置から引出したと云うような横倒しに齒^はの減つた下駄^はを穿^はいて、ぶる／＼慄^{ふる}えながら、

豊「お母^{つか}ちゃん、ちやア此^こ処^こだよ／＼」

ふみ「はい……………御免なさいまし」

女「はい……………おや／＼いけない……………其^{そこ}処^こを明けちやアいけない、北向だから、此^こ処^この家^{うち}は風が這入つて寒くていけないから……………もう出てしまつて有りませんよ」

ふみ「いえ私は物貰^{ものもら}いではございません、三八さんのお宅^{うち}は此^こ方^ちでございますか」

女「あゝあ……………はい手前^{てまえ}でございます……………お師匠^{しせん}さん貰^{もら}い^{にん}人が来^きましたよ、一^{ひと}夜^よ明^あければ直^{すぐ}に来^きるんだから驚^{おどろ}くね何^{なん}うも」

三八「どなたで……………何^ど方^{なた}で……………」

ふみ「はい誠にお久しゆうございます、私は奥州屋の家内で」

三八「へ、へいへいこりやア何^{なん}うも御新造^{ごしんぞ}……………何^{なん}うもあなたのお目^めが悪^{わる}くおんなすつて、

おゝこりやアお目^めが……………おい／＼婆^ばさん、あのね足を洗^{あら}わなければならぬ、跣^{はだし}足^{あし}だ、

雪の中を跳足で、なにを湯だよ、洗濯の盥たらひでなくても宜よいてば、何を、えい強情張らなくとも宜い、知ってるお客様だ、手拭てぬぐいの乾ひたのを持ってお出で……さ此方こつちへ」

ふみ「はい、恐れ入ります」

三八「まあ、そんなことは御遠慮なしに、えい這入って宜しゅうございますとも、なアにそんな事を、此方こつちへお上んなさい、嬢ちゃん大層おみおきくお成んなすった、何ういうまア何ですか、お寒うございましたろう、何処から、駒込から、いやそれは大変でした、さ、此方へお出でなすって火鉢の側へ、婆さん炭すみとり取を持って来て、其方そつちにも火鉢を出しな大勢だから一つの火鉢にかたまる訳にいかねえ、それからお茶を入れて菓子を出しねえ、何い、そう幾つも手が有りませんと、強情げいツ張はりの婆ばあだ……さ此方へ……お変りもございませんで……御難渋かねの事で、予て承わって居りますが」

ふみ「申し三八さん、私も此様こんなにおちぶれましてございます」

三「へい誠に御無沙汰致しました、横浜にお出でなさる事は聞きましたが、何うも浜だから一寸お尋ね申す事も出来ず、お目の悪い事も存じませんでした、何れ又病院にでもお入りなすってお療治でも致せば」

ふみ「はい有難うございますが、病院へ入りまして、入院中も種々いろくお医者様も御丹誠な

すつて下すつたが、何うも治りません眼と見えまして、もう何も彼も売^{うり}尽^{つく}しまして此様なにおちぶれ果てました、私^{わたくし}はもう前^{まえ}世^{のよ}の約束だと思つて居りますが、親の因果が子に酬^{むく}うとやら、何にも知りません子供たちにまで（涙をふき）饑^{ひも}しいめをさせます、何方と云つて知つている人もございませんで、始めの程は御懇意様やお慈悲深き方から救われましたが、又二度とも参られませず、新助がお馴染でございますから、何うか三八さん（歎^すけなく）あなた^{とこ}の処へなんぞ申して参られた訳ではございせんが、能々^{よくよく}と思召^{おほしめ}して、子供を可愛想と思つて、少しばかりお恵みなすつて下さい（泣^{なき}伏^{ふす}）昨日^{きのう}から子供達には未だ御飯^{ごぜん}を食^くべさせません、今朝程少しばかりお芋を買つて食^くべさせましただけで」

三「おゝ、おや御新造何うも何ともはや、人という者は何うも過ぎて見なけりア事の分らねえもんでですが、あなたの処^{とこ}は結構なお身代で、旦那さんは一寸お出での時も金^{きん}側^{がわ}の時計を頼まれ物だとおっしゃつて、五つも六つも持つておいでなさる、あの御身代が今のお身の上、三八などは前から貧乏だから格別貧を苦にも致しませんが、良い人ががたりと斯うなるというと誠にお困りなさる、矢張^{やっぱり}あなたなんぞは結構のお身の上だけに、貧乏^{ひと}に甚く驚くと云うもんで……旦那様が妻恋坂下で三年後^{あと}に御切腹なすつたと云うのだから、これが何うも驚きましたね、何うも」

ふみ「はい、それにねあなた、あの時に人様からお預かり申した大金がございました、それと金側の時計が一つ紛失なくりました、金もございせんから、若し盗賊にでも取られまして、それであゝいう堅い気性でございまして、はッと取りのぼせましたか、又預り金を取られ申し訳が無いと切羽詰りに成りまして、あゝいうことに成りましたか、もう歿なくりますると、中々先の貸金は参りませんで、借財も多くございましたから、人様も、道具を運んでしまつて、他家わきへ預けて身代限りを出して仕舞え、そうすりア後あとで何どの様にも身代が出来ると云つてくれたお人も有りましたが、得心づくで借りた借財、何うしてあなた、そんな事が出来ましょう伽蘭堂がらんどうにしてお渡し申して、残らず店の品物まで売り尽しましてお返し申したから、手許てもとへは僅か百二十十円有りましたが、それから私は眼が悪くなり、病院に這入つたり何や彼やで遣い果し、浜でも富貴楼の御夫婦が御親切になすつて下さつたが、東京こっちに親戚みよりも有りますから、それを力のほに上りますと、昨年の九月其の親戚の者も何ういう因縁でございますか人手に掛つて非業な目に遇あひ、その葬とむらい式まで困る中で私が出す様な訳、何処と云つて頼る処ところもございせんから、駒込片町の三春屋みはるやと申す安泊やすどまりに居りまする」

三「おやゝ何うも間が悪いと悪い事ばかり出来て、間が善くなると一切何うも善い事ば

かり出て来るものだから、又是から悪い事ばかりも有りますまいから、御心配なさんな、わたしはお金も何も無いから、芸者屋へ往きましよう、旦那様から御祝儀を頂いた芸者から勸化帳かんげちようでなく、小さな一寸した帳面を拵えて往つて、志を何程でも、旦那様の何なんでがす、御蟲肩になすつた芳町よしちように金八きんぱちにお豊も御ひいきに成りました、義理が有る処ところで、先松源と鳥八十、大茂へまいりまして、又下谷の芸妓ではお稻に小メ《こしめ》、小竹こたけ、小糸つ、おみき……兎も角も私が往つて貰うような事にしましよう、若い処ところの芸者や何かは会の義理を出すと思えば貴方一寸びらを拵えても、びらが五十銭に贈物おくりものが二円も掛る、大した散財に成るんだもの、それは又僕が何うにも致しやす、何うにか成りますよ、氣を落しちやアいけません、嬢ちゃん何うも温順おとなしくお成んなすつたが、何うもお加減が悪うございますか、大層お痩せなすつて」

ふみ「なにあなたね、続いて二日ぐらい食べぬ事が有りまして、又食べさして又たたた食べ……（泣沈む）何うもが、餓鬼道のようにでございますから瘡やせませす訳でございます」

豊「お母ちゃんつか、お飯まんまが食べちやいなア」

三「おゝゝ上げますゝ………婆さんお膳立をしてくんな、な何を、お飯を何うしたと、冷ひやではいけません温あつたかいのを、お雛ひなさん処ところへ往つて借りて来な、何か無いか家うちに、何を何

処かに往つて鳥鍋かよせ鍋でも何でも熱い物でさいあれば……なにを雪が降つてる、雪だつてお前春の雪、そんなに寒い事はない……さゝ御飯を」
おまんま

これから親子の者にお飯を食べさせたので、大きに温まりがついた。
あつた

三「もし男の胴着や何かは女には着悪いが、家には独身者ですから、女が居るには居りますおが女の部には這入はいねえで、女の大博士に成つちまつて、羽が生えて飛びそうな雇やといば婆あです、えいまアお前さんは少し此家こゝにお待ちなさい、集めて見ましよう、いけないと

云つたらお前さんも御一緒にお出でなさるよう、先方むこうだつて人情ですから出ましよう」

と是から三八は先ず彼方そちら此方こちらを頼み散ちらかして歩くと、立引たてひきにア見得張みえばる商売ですから、

あの人が幾許いくば出したから、まアわたしも幾許出そうと云うので、多分にお金が集つて来ました。

三「もし御新造さん旦那が善いい方で物を遣つて有るから、旦那の愛敬で何うもお気の毒だ、私わちきにも出さしてくれと云つて呉れます、若い芸者衆やなんども、呼ばれた事は無くてもお名を聞いたばかりで出すから、三八出さしておくんなさいと、これが旦那の徳と云うものは恐ろしいもので、何うも大したもので、是から柳橋と新橋と吉原へまいりましよう」
ふみ「はい／＼何ともまア……それもあなた様の御親切で」

三「此の他には全^{まる}で方なしの処^{ところ}には往^いかれませんが、あゝ善^よい事が有りますぜ、旦那が一番蟲屑^{むしくず}にしてくれた人という者は何で美代吉さんです、是が運の善い人で、自分が惚^{ほれ}た男に請出されて、蟪蛄^{かいこ}町に居たのだが、越して新らしく此の頃建つた家を借りて、それが今御徒町^{おかちまち}一丁目の十六番地へ葉茶屋を出しました、松山園^{まつやまえん}とかいう暖簾^{のれん}を出して、亭^{おやだ}主^まの方が坊ちゃん育ちの善い人だから、それに美代ちゃんは旦那に御蟲屑^{むしくず}になつたんですから……分らねえ奴は有松屋の婆^ばさ、何だかぐずぐず云いやがって、否^{いや}なら止^よしやアがれとも云わないが……それとちがいは大丈夫だ、先方^{むこう}が大きいから二十円や三十円は出してくれるかも知れないが、まアあなたを連れてつて見せなくてはいけない」

ふみ「何ともお礼の申し上げ様もございません」

三「何う致しまして、何^{なん}にしろ跣足^{はだし}じやア往^いけません、何に仕ましようか、車をそう云つてお呉れ、此の嬢ちゃん^{あいのり}と合乗^{あいのり}に乗つて三人に成ります、それ故に三人乗つてそろく挽^ひいて、僕は贅^{むだ}だからぼくく下駄^はを穿^はいて歩いて往く方が便利だ」

と親切な男で、車を拵^{おそ}えて、余り遠くも有りません御徒町松山園に参り、台所から、

三「へい今日^{こんち}は、夜分^{おそ}晩く出まして、相済みません」

婢「はい入らつしやい何方様^{どちらさま}」

三「えい御叮嚀ごていねいでは困ります、数寄屋町の三八で」

婢「勘八かんぱちさんと仰しやりますか」

三「勘八ではございません、三八ですとそう仰しやつて下さいまし」

婢「はい、あの何です数寄屋町の雇八がんぱちさんという方が入らっしゃいました」

三「何うでも間違つてやがらア」

美「そう、おやまア何だね、表から這入れば宜いのに」

三「いえお店の方から這入つて茶の壺を引倒した事がございますから……誠に御無沙汰致しました」

美「もし此方こつちへお上んなさいな」

三「お取膳とりぜんで、八寸を四寸ずつ喰う仲の善さ、という川柳があります」

美「何をえ」

三「何でも始めは穢きたない物を連れて来たが、段々綺麗なお話に成るので……旦那誠に御無沙汰を」

庄「おや、さ、此方こちらへお這入んなさい」

膳を片付けそうにするを無理に止めます。庄三郎は織色おりいろの羽織きを著きまして、二子ふたこの茶

の黒^{くろ}ぼい縞^{しま}の布子^{ぬのこ}に縞の前掛に、帯は八王子博多を締めて、商人然としている。かたくの方は南部の乱立^{らんたつ}の疎^あつぽい縞の小袖、これは芸妓の時の着替をふだん着に卸したと云うような著物^{きもの}に、帯が翁格子^{おきなごうし}と紺の唐繻子^{とうじゆす}と腹合せの帯を締めて、丸髷に浅黄^{あさぎ}鹿子^{かのこ}の手柄が掛つて、少し晴々^{はでく}しい商人の細君然たるこしらえでも自然に垢^ぬが脱^ぬけて居ります。仲の善い夫婦で、思いに思つた仲でございますから、お飯^{まんま}を食べても物を衝^つき合つて食べるが面白いという間柄です。三八も馴染だから、

庄「さ此方^{こち}へ」

三「旦那追々御繁昌で」

庄「此の間は何うも何ですな、池の端の方へ小僧に持たして遣りました時に多分に買つて下さつて」

三「いや何でも多量^{たんと}という訳には往^ゆきませんが」

庄「なに些^{ちつ}とずつでも度々^{たびく}買つてくれる人が有れば善^よいので」

三「大變に何うも、いえ評判が宜うがす、一つは此方^{こち}の御新造が御器量^いが美^いいからお茶の色がよく出ますとね」

美「あら何うも情^いが出る、いやな油だ事よ」

三「そういう訳ではない御新造様」

美「御新造様なんて名をお云いな」

三「それ何うも凛々しく成つちまつて気が詰ります……おかみさん、誠に何うも御無心に来たんです、芸者衆の処に斯うやつて帳面を持つて貰つて歩いて、金も集りましたが、是では何うも親子三人行立たないので……世帯を持たして何んな商法でもさせたいと思つてもお母さんが目が悪いんですから、と云つて親の有る者は育児院では入れてはくれません、まいから、仕様が無いから、何うか工夫をするにも金さいありア附かない事も有りません、それは他でも有りません、あなたを日頃御最良にした奥州屋の」

美「奥州屋の、おや」

三「それ美土代町の新助さん、妻恋坂下の切腹三法南無三法さ」

美「あゝそうかね、それが何うしたの」

三「何うしたつて仕ねえつて、驚いたね何うも、駒込の安泊に居るつてえんで、何だか目が潰れてしまつて、本郷の切通しを下りるにも三度とか四度とか転んだが、下へ転がり切らなけりやア、落著いてこれから歩き出すという身の上にやア往かないてえんで」

美「何うぞ此方へお這入りなすつて……お初にお目に懸ります、かねてお噂には聞いて

居りましたが、さア此方へお這入んなさい…………この火をなんして上げな」

ふみ「お初にお目に懸ります、新助はお心安いそうですが、私はお目に懸った事も無いに、新助が彼んな訳に成りましてから、だん／＼零落いたして…………親子の難儀を三八さんが可愛相と仰しやつて下さって、此方様まで御無理を願いに上って…………お蔭様で親子の命が助かります、誠にお気の毒様で」

庄「お、いゝや御心配しなさんな、三八さん私は何でもお力に成りますから、まア／＼心配しなさんな」

と庄三郎親子ぐるみ引取つて世話を為にやならんが※に云い出してはと庄三郎思案にくれました。お美代は知りませんから此方と是から昔物語になりますと云う、ちよつと一息。

七

そこでお美代が火鉢に沢山火を取りまして、親子の者を五徳に並べて、たつぷりとした茶碗に茶を入れて出します。有合わしたお菓子を紙に包んで子供にあてがい、

ふみ「おや有難うございます、お構いなすつて下さいますな、有難う存じます」

美「おや可愛らしい事ね、女のお子さん、お何歳に成ります」

ふみ「はい七歳ななつでございます、豊と申します」

美「おゝそう親の無い方は温順かた おとなしいもんですね、可愛いじゃないか何うも、お少さい方は」

ふみ「はい男でございます、三歳みつで新太郎と申します」

美「そう、温順しい事ね、叔母ちゃんとこ処に今夜は最う遅いから泊つてお出でよ、泊つても宜いいかい」

豊「あゝお母ちゃんつか、あの叔母ちゃんが泊れと仰しやるから泊るよ、泊つても宜いいかえ」

ふみ「いえもう穢きたない姿で……何うかお邪魔に成りませんお台所だいどころの隅にでもお寐ねかしなさ

つて、今居ります安泊りのような、あんな穢きたない処とこに居るものでございますから、只夜よを明

かさしてさえ頂すすけば……これ、そう戴さくいて直に食べるものではない、お行儀の悪い……久

しくお菓子も買つて食べさせる事が出来ませんから……こんな育て様は致しません、こ

の頃はがつく致いたしまして、幾ら小言を申しても、下さると直に食べるので……そんなに

お口に入れる者じやアないよ」

豊「だつてもね、わたしは食べたいもの、あの腹はらが空ぼろいてるから」

三「まことにお可愛そうじやア有りませんか、これが奥州屋のお嬢ちゃんやお坊ちゃんとは思われません……えゝなに子供衆しゅだから氣儘いっぱいにさせて置くが宜しい、実に乱暴な児こが有りますからな、此の間も私の家うちに這入り込んで、鍋や何かの物を掴み出して食つたり、種々いろくの器物ものを放ほうつたりして何うも……それに旦那のちの無い後に此のお内儀かみさんが正直な氣性だから、身代限を出す時にも大概の横おうちやく著の奴なら、道具や何かは親類にかして空明からあきにして預けて、後あとでずうツと品物が廻まわつて来るようにと云うのが普あたりまえ通だのに、残らず店の品物まで売つたという、そうして先方むこうに心配を掛けないなんて……矢張やりあなたそうく悪い事ばかりはございせんから、まアお眼を……何うか一番上手なお医者さんに診みてお貰いなさい、おゝ永田町の伊藤方成いとうほうせい先生が、私はあの方に御鼻眞ごびまになつた事がございますから、その中うち又願うひに出ましよう、貧乏人にはお藥をたゞくれるてえんでございますから、私が頂ういてまいりましよう、それはお上手な事は、お医者さんがわるいと伊藤さんにかゝると云うくらいだから、内瘡そこひが眼が明あいて駈なけ出したり何かするんで、何うも不思議じやア有りませんか、それにお嬢ちゃんも七歳ななつにお成んなさりやア学校に入れて教育なくては、そして御親類と申すのは何ういうんです」

ふみ「はい、私の兄で元徳川の士族でございまして、大西徳左衛門おおにしとくざえもんという者の総領で、

この兄の名は徳造と申して、これも峯樹院様の御用達をして百俵も頂いて居りましたが、放蕩無頼で、蔵宿くらやどには借財も出来、頂戴物やら先祖の遺物ゆいもつまで何も彼も遣い果し、終しまいには私の身体まで売ろうとして、私を騙だまして悪い処ところへ沈めようと掛りましたくらいくらいの磊落者くものでございます、それでもたった一人の兄でございますから、また相談に乗らない事も有るまいと浜から出て来て見ますと、昨年こぞの九月四日谷中の螢沢という処で非業の死をいたし……是も乱暴の罰ばちでございましょうが、殺した奴は何者でございますか、多分御酒を飲んで暴れか何か致して斬り殺されてしまいましたのでございましょう、その検屍の事から葬式も此の難儀の中で私が出す様な事でございまして」

三「へいえ何うもお不仕合せ、なれども御新造さんは根が武士のお嬢さんだから何うもと平常私が申して居りました、一昨年花の時に御新造様の御様子おとしが何うも町人とは違いますと云いますと、旦那が、えゝなアになんて瞞ごまかして仰しやらなかったが、何うも違うと思つて居りました、兄様あにさんと云うのは酷ひどうございますね、一体何をしてお居でなされたのでふみ「はい、零落おちぶれまして車を挽ひいて居りました」

三「車夫くるまやを殺して何も盗とる訳もないのですからな、何うも中に筒ツぽの古いのが丸めて這入つてるだけですからな」

ふみ「はい、矢張お酒を飲むかなんかして、暴れて斬られたのでしよう……あれが」

三「いえ何うもそれに、あなたの処の旦那の何うも腹切りが、何うしても、分らないというのです、そりや何方でも評判です、あのように沈著いて居る方がね何うも」

美「ちよつと三八さん、あの何だね、一昨年おとしの九月四日にね……最良だつて情夫いろでも無いのですが……あの晩にお帰りなさらなきやア彼様あんなことは無いものを……あれをお帰んなすつた晩だよ」

三「そうですね、何ういう訳でがしような、あれは」

ふみ「はい何うも御検屍を願ひまして腹を切つたという事には成りましたけれども、もう実は仰しやる通り沈著者おちつきもので、種々いろくに分別して、人という者は事を落著おちつけ心を静めて見れば、何んな事でも死なずに済むものだと申して、己おれなんぞは是まで苦勞をして来たから何んな貧乏おちぶに零落れても困りはしない、又工面が宜く成つても困りはしない、何でも詰らない事をくよくよ思うな、心を広く持つてと、一寸寢酒を飲みましては私共の心の落著くように云つてくれまする、貯えて居りました金子は他人ひとの預かり物ですが、それが有りませんでしたから、多分盗賊ものどりだろうと思います、それに金側きんがわの時計がございません、何うも腹ア切つた後あとで、まさかあんな姿をしている処を盗賊どろぼうも掛りますまいとは思いますが」

三「そう云えば彼の時に何ですね、乗ってお帰りなすった車夫ね、何だかぶきくした奴ね、車夫さん急いでお呉れたら、急げたって人間の歩くだけきやア歩けやしないって、私ア忌々しくていまだに忘れられねえ、彼奴が何うもなんと云えませんよ、何うも変な奴だね、実に何うも腹を切るというは妙ですな、それとも預かり物を取られまして、先方に申訳が無いという堅いお気性で」

ふみ「はい、私の良人は元は会津様の藩中でございまして、少しばかりお高を頂いて居りましたから、今では商人に成りましても武士の心は離れません、あゝ濟まない、堅い気性から切羽詰りに相成つて」

美「もしあの奥州屋の旦那様は会津様の御家来ですの、会津様の何というお方、重役のお方でございますか」

ふみ「はい、私も委しいことは知りませんが、お高も余程頂戴致した様子……松山久馬の次男の久次郎と申す者だとよく私に申しました」

美「あらまア、まア何うも、あら松山さんていの、あらまア一寸三八さん旦那は私の兄さんだよ、何うもまア」

ふみ「はゝア、あなたはお妹御あらまア」

美「私がね生れると、道楽で御勘当になったという話をお母つかさんが死ぬ前に私に申したんですよ、お兄あにいさんは家出をしてしまったツて、私が生れて間もない折ですよ、お兄さんに遇あいさいすれば力に成ると思って、私は神信心かみしんじんして居たが……道理で、それ私のお父とつさんの書いた短冊が貼つて有つたら、家うちへ来て」

三「そうく、そう仰しやれば思い出した、あの時ぼろりとお泣きなすつた……それからあなたの身請の相談、これは本心放埒ほうらつで、敵かたきを討つ所存はねえに極きわまったとも云わないが、請け出しに掛つた時は変だと思つて居りました」

美「だからね兄にいさんは只可愛にがりなすつたのだよ、それで無くてあんなに可愛がる筈はありやアしないね、知つてたから」

三「あの何うもその短冊が何うとか云いましたね、親が何うとかして何うとかだつて……あれからお上りになつて、それで身請と成つたんでしよう、だけれども間夫まぶが有るなら添わして遣ると、何うも由良之助見ていな事をおしやつたが、その歸りに與市兵衛よいちべえ見ていに殺されるていのは何うも分んねえ」

美「殺されたのならば私も何うも残念で耐たまりませんよ」

ふみ「私も何うも人手に掛つたと存じますが、もし殺した奴でも分つたら、眼が見えなく

とも武士の家に生れた女、亭主の仇を尋ね探して討ちたい心もありましたが……あゝ斯様に盲人に成りましては」

美「おゝ不思議な御縁でお目に懸りました、私の兄の女房なら私の為にはやつぱり姉さん、兄さんの敵だつて討てない事は有りません、ねえ庄さん、お願ですから若しも敵が知れましたら、藤川さん貴方も以前はお旗の下ではありませんか、たとえ女の細腕でも武士の家に生れた私です、一生懸命になりますから、助太刀して、屹度知れたら、敵を捜して討たして下さい」

というのを聞いて居りましたおとよが七歳では有りますが、伶俐な子でありますから、豊「お母ちゃん、お父ちゃんを殺した奴が有れば、豊ちゃんも敵を討ちます、この叔父ちゃんに手伝つて頂いて、ね叔父ちゃん手伝つて敵を討たして下さいよ」

ふみ「あいゝよくお云いだゝ、死んだお父さんが草葉の蔭で聞いたらさぞお喜びなさるだろう……親孝行の事を云つておくれだ」

三「へい感心々々感心」

ふみ「只今の世の中では敵を討つことの出来ない世の中とは予て聞いては居りますが私は昔風で、何うか敵を討ちとうございます、もし敵が知れたらば私さえ殺されゝば宜しゅう

ございましょうから、何うぞ敵を討たして下さいまし」

三「まあ、感心だ、実に年は往かないが、是は矢張松山さんのお胤だけ有つて、私ア聞いて居てぼろりと来ました、いやこれは誰でもポロときますよ、私はね芝居でも世話場であつと此様な子役の出る芝居へ往つて見物していると、子役が出て母様というと、まだ何だか解らない中にぼろ／＼と直ぐお出でなさる、誠に何うも恐れ入りました」

庄「三八さん、此の親子の衆は私が引取つて又敵を討たせる時もあるうし、何にしても親切にしておくれで、今夜は雪が降るからお泊め申すから、安心して置いて歸つて下さい」

三「有難う、だから此方に参ると申したんです、有松屋の婆さんは出しませんね、何うかお前さん旦那も来て始めて逢つた時にもあゝしてくれたんだからと云つても、決してそんな事をする義理合は有りませんと云うような顔附から、慾にばかり目を附ける婆で、彼奴は腹でも切りそんな婆です……まお暇致しましょう、へい左様なら御機嫌宜しゅう」

美「まことにお草々致しました、車でも」

三「えい私の家に歸るんですから、なに車も待たして置きましたから、ちようどあの車に乗つて歸ります、へい左様ならお女中、御新様それじゃお泊んなすつて……左様なら」と三八は歸つてしまふ。これから温かい物でお飯を食べさせて、親子の者を丁寧客座

敷^{かた}の方に寝かして、自分は六畳の茶の間の方に寝ました。夜^よが明けると、お美代が側に床を並べて寝ていた庄三郎の居ないに驚いた。

美「何処へ往つたろう……旦那は何処かへお出でなすつた……兼^{かね}や（下女の名）旦那はお手^{ちようず}水かえ」

兼「いゝえ存じませんよ、先刻^{さつぎ}から此処で焚き附けて居りますが、知りませんよ」

美「何処へ往つたんだろう」

と呼んでも音も沙汰も無い。はて変だ。と思つて二畳の処を開けに掛ると、栓^{しんぱり}張^かが支^かつてあつて唐紙^{からかみ}が明きません。

美「旦那」

と、揺^ゆるとたんにがらりと転げた音がする。飛び込んで見ると藤川庄三郎は何時^{いつ}の間に合口を取つて、立派に腹一文字に搔切つて死んで居りました。恸^{びつく}りしたのはお美代。

美「さア皆^{みんな}な起きてお出でなさい、良人^{うちのひと}が腹を切りました」

というから店の者も出てまいつた。店もまだ開けない中^{うち}でございですが、目の見えないおふみまでも来て子供も死骸に取り縋^{すが}つて泣き出します。すると傍^{かたわら}の硯^{すざり}箱^{ばこ}の上に書残した一封が有ります。これを開いて見ると、

書遺し候我等一昨年九月四日の夜奥州屋新助殿をお久の實の兄と知らず身請されては
 一分立たずと若氣の至りにて妻恋坂下にて待受して新助殿を殺害致し候其の時新助殿
 始めて松山の次男なる事を打明し十九ヶ年の年月を経て妹お久に巡り合い身請をして
 此の庄三郎と夫婦にさせんと存じて約束致し候其の帰り途なり斯なるは不孝の罪持合
 せたる金五百両は其方様に差し上げ候間是にて妹お久を身請して女房となし松山の
 家を立てさせくれと今際の頼み其の場は遁れ去り其の金五百両にてお久を身受致夫婦
 と相成候それ故に苗字を取て松山園と号け居りしが昨夜親子の困難を見殊に助太刀の頼
 み人は知らねど心の苦しさ又昨年螢沢にて殺害したる車夫徳藏は妻恋坂下にて新助殿を
 殺したる時に乗せたる車夫にて其の時取り落したる煙草入を所持なし居り是を買いくれ
 よと云いかければ是非無く殺害したるに新助殿妻おふみ殿の兄御とは露知らず昨夜の物
 語に始めて知り兄良人の仇申訳相立たず自害致し相果て候我等なき後々は我が財産は
 松山の御子達へ引渡し候処実証なり松山の家名は二人の子供を以て跡目相続を頼み
 入り候妻お久は年若故再縁致し候様我は兄貴の仇なり心を残さぬ様に斯書残し候
 との書置に皆打驚き、勿々差配人差添えの上で訴えに相成ります。漸く事済になつ
 て、此のおふみの子供をもて相続人に相定めます。又お美代は後、後家を立て通して居

りましたという。おふみが死去の後に子供等が引続きまして松山の家を立てます。御徒町の腹切はらきりと人の噂を聞きまして、愚作なれど一冊のお話に纏まとめました、松と藤のお話でございですが、先ずこれで全尾ぜんびでございす。

（抛酒井昇造、佃與次郎速記）

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の二」近代文芸資料複刻叢書、世界文庫

1963（昭和38）年7月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の二」春陽堂

1927（昭和2）年12月25日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

入力：小林繁雄

校正：松永正敏

2005年10月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

松と藤芸妓の替紋

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>